
テンプレート？夢のまた夢だよ

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレチート？夢のまた夢だよ

【Zコード】

Z0299BA

【作者名】

リョク

【あらすじ】

田覚めたらリリカルなのはの世界に？

明らかにチート転生者も居るし、こつちには用途不明のレアスキルに聖王の鎧にばれたら殺されるであろう（自分が）ユニゾンデバイスのアギト……。

これは主人公がチート転生者のオーリ主（笑）から逃げるお話である。

憑依先はクローン（前書き）

あけましておめでと「ハジケ」こめますーー。
ついわけで新小説をーー。

憑依先はクローン

何時も通り起きる、それが普通だつた、だけど今日は体が重く、それで居て暖かかった。体が何か温かい水に浸かっている様な感覚、いや実際に浸かっているのだろう。

重い目蓋を開けるとそこは研究所だつた、本当にそれしか言えないのが辛い…………。つかここ本当に何処？

「ゴボッ！？……ゴボ、ガボゴボ（こ）ッ！？……うえ、気管に入つた）」

器官に入つたが大丈夫のようだ。

「ふむ、正常に作動しているな

「魔力も高い、成功のようだ」

目の前の科学者？みたいなのが喋つてるんだがよく分からない。本当にここ何処？

六年後、あ？話が飛びすぎ？しょうがないよ、僕ですから。まあそんな話は置いといて……僕は魔法少女リリカルなのはの世界に居るらしい。え？分からないうつて？まあ簡単に言えば僕はこの体に憑依したらしい。

その体は古代ベルカの王族のクローン、聖王オリヴィエのクローンらしいです。性別はちゃんと男です、女になつてたら自害します口レ絶対。

まあ辛い訓練や実験は苦しいですが生きたいので何とか必死に生きています。

僕はヴィヴィオの成り代わりかと思つたんだけビビコにはアギトも居たから絶対に違つて言つ事だけは分かつた。

そして僕はアギトのロードです、炎の魔力変換資質ですから使えます。

レアスキルは聖王の鎧以外にもあつたりします、実質二つです。ですが使いこなせるかと聞かれたら使いこなせません、自動でも無いですし時間も少しですがかかります、それにこれは魔力ではないですし。

研究院達の話を聞いて分かつたのですが原作組、もとい原作キャラ達とは一応同じ年です、あくまでこの身体の身体年齢と同じなだけですが。それに原作には居ない人もいた。

オッドアイのイケメン野郎、それに一無限の剣製『unlimited blade works』と言つ名前のレアスキルが……。

どう見てもチート転生者です本当にハイ。

で、どうするか……。

「どうすれば脱走しよう、アギト

「わかったぜマイローナ

このままじゃあ殺されるからね、明らかにハーレム狙いだし
アギトも狙ってるだろ?」

フラグは知らないといけないで立つ

あれから一年、脱走は上手く言つたと言えば上手くいった。前々から考えていた事ではあつたし計画は時間をかけて練つた。事実逃げ出せたのだからそれは良かったのだろう。で、今は地球……なんで？

正解は地球の常識しか知らないから、お金についてもだ。

憑依前は純粹な日本人、それに何故か地球に惹かれる。

「よし！魚でも取るか！！」

「楽しみにしてるぜオウカ！！」

とり合えずバリアジャケットを着てモリを持つ、デバイスは単純な西洋剣だ。それを背中に携え海に飛び込む、春先の海水は肌を刺すように冷たかつたがバリアジャケットがそれを守る。目にはゴーグルを付けていたので海水は目に入る事は無く呼吸はバリアジャケットがカバー出来ている。

「（今日は少し遠くまで行つて見るか）」

思えばあの時あんな事を思わなかつたら良かつたんだろう……。

「よし、大量大量」

アミには大量ともいえる魚介類や貝類があった、これだけあれば三日は事足りるだろう。そして帰ろうかと思つたとき……。

「ん? 何だあれ?」

海のそこに光る何かが有つた。

「もしかしたらお宝かもしれない」

実際にこの一年間はお宝を見つけることもあつた、少なかつたとは言え質に入れ換金すれば大金にはなつた。言つてしまえば経験だ。

そう思いながら海に潜り、光る物の近くに行く。光るものの中には

綺麗な日本刀だった。

「(何だ、外れか)」

だけど外れにしては綺麗な刀だ、むき出しのままなのに鋆びてる様子が無い。むしろ新品のよう光り輝いている。

「（まあ持つておいても損は無いだろ）」

そんな感じで触った。

その瞬間刀を中心に莫大な力の奔流が生まれる。

「「ゴボゴボーーー（やばつ……溺れる）」

急に海流が生まれその中に飲まれそうになる。
だが魔法を使い周囲を少しだけ蒸発させそのまま海面にでも。

「ふはーーー」

すぐに体に溜まっていた二酸化炭素を全て排出し酸素を取り込む。

「ぜえ……はあ

息をしながら何とか自分のペースを取り戻す、魚や貝はちゃんと持つてきた。ただ明らかに原因である刀も持つて來ていた事には驚いた。

刀を手から離そうとしたが取れなかつた。

仕方が無く腕を切り落とそうと早まつたことをしようつてバイスの剣を背中から抜いた。このときの考えは頭に酸素が回つていなかつた為である勘違いはしないで欲しい。

その時、手から刀が外れそのまま剣に吸い込まれる、剣は形を変え先ほどの刀に変わつた。

「……一体どういう原理だよ」

そう言いながら僕は島に帰るのでした、マル。ちなみに今は無人島暮らし、ナレつて怖いね。

酷い事？お前が言うな！！

「ケホケホ……」

「大丈夫か？才ウカ？」

あー、風邪引いた…………。 原因は恐らく昨日の海流に飲まれた事が原因だろうな。 あれから体中に変な力が渦巻いている、もう一つのレアスキルと同じ力だから恐らく体外に放出はできるだろう。

「…………今日は私が作るな」

ああ、ありがとう アギト

ああ、平穏だ。研究所暮らしが長かつたからか今は平和が大好きだ、
だけど何時までもここに居られるわけじゃない。

ひそひたかひ

「そろそろ潮時かな」

寂しく呴いた言葉は誰にも聞かれる事無く、響いた。

「もう朝か……」

風邪はもう治った、力も何とか安定したものになつていて、そもそもこの拠点から離れないといけない。何時管理局が来てもおかしくない……だから……。

「…………本当にここで魔力が観測されたなんですか？」

外から声が聞こえる……同じ年くらいの女の子の声だ、その声の主は……。

茶髪のツインテールの少女だった。

他にも金髪ツインテールとかショートの少女とか……。

なのは、フロイト、はやての三人だった。

「最悪だな……」

「これが世に聞く」都合主義なら間違いなく神様を呪つてやる。

まああの銀髪オッドアイのチート野郎は居なかつた、それだけが救いだろ？。

「オウカ…………」

アギトの小さい体が震えているのが分かる、僕のこの体を作りアギトと一緒に実験していた組織は管理局だつた。偶然見つけた資料で知つたんだ。

だからアギトは管理局を信じなくなつた、本来はシグナムの相棒になる筈だつた子…………。

僕はあくまで一割がそんな事をやつてるだけに過ぎないと頭の中では理解している、頭の中だけだけどね。

「大丈夫、逃げられるから

アギトを心配させないよう抱きしめる。

「でも、でも…………」

「大丈夫だから…………」

自分の体も震えているのが分かる。

「あそこに移動船がある、それに乗れば…………」

逃げられる、そう確信してもやはり怖い…………。

でも…………。

「逃げなくちや…………」

言ひ、言葉を紡ぐ…………「デバイスに名前は無かつた、それを書き換えられ新しくなったこの刀の名前を言ひ。

「アマノムラクモ、set up」

虹色の魔力が体を包み込む、バリアジャケットが構成される。バリアジャケットは綺麗な赤い着物に白色の羽織、足はシンプルな靴、籠手もあり以外に丈夫そうだ。

「走つて逃げる」

足から魔力を放出する、魔力は炎に変わり速度を上げる。

「おりやあーーー！」

洞窟から飛び出して海岸にあるもう一つの洞窟に置いてある次元移動船に乗れば良い。

いきなり飛び出したため三人に気づかれる、それでも逃げる。

「待つて！！」

高町なのはが僕を止めようと声をかける、だけ止まつてたまるか
…………

「待つてくださいーーー時空管理局ですーーー話を」

「い、嫌だーーー！」

今度はフェイント・ト・ハラオウンが田の前に立ちふさがる。

素直にはつきりとそう言ひ、そう言つたときのフュイトの顔が少し泣いていたが気にしない！

八神はやては遅い、つまりフェイトの隙を着いた今なら逃げられる。

「うむ、うむ……」

「ええ？」

「全ヘル...アリテ、アガハ」

背中に足を乗せるのは赤毛の三つ編み…………守護騎士の一人ヴィー
タだ。

何でここに…………って回りをよく見ればあの転生者以外全員居るじ
やない…………アンビリビーバボー！

「まあ待てヴィータ」

ヴィータに声をかけたのはシグナムさん、ゴメンあんたの未来の相棒は僕の相棒です。

「やつと止まつたの

「泣きやんでもなフエイトやん

ああ、全員来てしまった……………。中には泣えたはずのコインフォースも……。

「おーいー！めえー！何でこんな所に居るんだー！」

耳元でうるさい声出でないでくれ……………病み上がりなんだから。

「待て、ヴィータ、流石にそんな口調では言えないだろう」

「もうだよ、ヴィータちゃん」

『……………アギト、今なら』

『ああ……………』

「ねえ君、名前教え」「ニニゾン・イン」「ヘッ！…？」

名前なんか教えない、教えてあげない！僕の平穀を乱す者には教えてあげない！！

そう思いつつも一時的にぶつ飛ばせたのはあくまでほんの一時。

「あれはまさか融合騎ー！？」

「リンクフォース以外のユニゾンデバイス……………」

リンクフォースが驚き、はやても何か言つてくる。

「今のうちに逃げ……………」

つてまたかヴィーエタ！？

卷之二

ガキン！！

刀を靴から抜き振り下ろされた槍を防ぐ

まさかヘ川力の騎士たゞたなんてな

アハハハハ フンタとその武器が見てなしね 幻して語りか

卷之三

おお、こんなに簡単にきれた。
だナビ屋。」

「いや、アンタの体系じやあそれを使いこなせないんだよ、幼すぎてね」

そう言つと、ヴィータの首を掴む、もちろん絞める。

111

そして水月に膝蹴り、デバイスを放した一瞬を狙いデバイスに斬りかかる。

ザンツ！

デバイスを横に真つ一つにして、そのヴィータの首から手を外し腕で締め上げ刀で固定する押さえつけた。

「ヴィータちゃん」

「動くな……」

一括する、その一言で静かになる。

首に固定している刀でヴィータの肌を傷つけ、流血させる。

「全員解除してデバイスをこいつに投げろ」

「な、なんでこんな事をするの?..」

なのはがそう言つた。

「解除しろ、女」

だけど無視する、冷徹に……。

「駄目だなのはー!」この言つ事を

「」キ

少し煩いので黙らせる、ついつても首の骨を折ったわけではない。折れてないよね?

「ヴィータちゃん!..」

「黙れ」

なんか自分が悪役になってきたんだけど…………。
まあ良いよね。

「良いからとっととデバイスを解除して投げろ」

「…………」

全員が解除してデバイスをこっちに投げる。
僕はヴィータを放り投げると相手のデバイスを海に向かって投げる。

「ユニゾン・アウト」

「おう！…逃げるぞ！…オウカ！…」

「のまま逃げる、よし…上手くいく…！」

「…………なんでこんな酷い事を…………」

なのはが最後まで叫んでいる。

「…………そうだ！」

「お前等がそれを言つつか？」

ここまで言つておけばもう僕達には関わらないだろ、原作キャラ以外の魔導師って大した事なさそつだし。

それの大した事無かつた、恐らく転生者が弱くさせているんだと思う。

「もう二度と会わないことを願いな、今度は殺すから」

「何やつてんだよ……管理局の連中と話すなよ……」

あ、ヤバイ。アギトが泣きそうになつてゐる…………。

「ゴメンね、アギト、少し腹がたつたから」

「それならいいんだけどよ……」

取り合えず僕達はこの場から放れて船に乗り込む。

「行き先はランダムで、もちろん虚数空間以外でね」

そつと動き出す船、目の前は光に満ちていた。

桃色の光に

「なんですか」

そのまま船は大破し、海に放り出された。

遺跡とかに迷つたら敵とかと遭遇するよね、嘘?しないって??

「ふは…………はあはあ」

あの後漂流して何とか陸地?にたどり着いた…………。陸地と届つても海の中にある遺跡に入つたら空氣がある程度だつたんだが。まあ海に投げ出された時に追撃とかされたからな、主になのはに……。フエイトは必死に追いかけてきたからな、結界を破壊して海に潜つてやり過ごした。だけどまさか海にまで砲撃するとは……恐ろしい。

なんといつ冷血を…………。

「でも逃げ切れたんだね」

「ケホケホ…………、なんとかなあ」

アギトも無事だつたし、これからのことを考えないと…………。それにしても…………。

「…………何処だ?」

本当にここ何処だよ…………見た事も無い遺跡なんだけど…………もしかしてまだ発見されていない遺跡とか!?!?それなら俺が第一発見者になつて……つて駄目だ。僕戸籍持つてない。これなら不法滞在者になつて罪に問われる…………そんな事はあつてはならない!!

「それはともかく……」

見た事も無い遺跡、謎の場所……コソモジ心を躍らせる物はあるだろ？「否、無いであらわし……考古学者じゃなくても探検してみたいと言ひ気持ちがあるだらわ。何が言いたいって？つまりは……

「探してみるのも一興かな？」

子供心を制御できない訳ではない、これは知識欲だ。たぶん……。それに何故かこいつは昔から惹かれる。

「よしーじゃあ探検しようかー！」

「……」いつて始まつた遺跡調査、中々楽しそうな始まりだった。

「……」いつてかなり古い遺跡だねえ

それに見た事も無い物質で構成されていんし……それに良いくらいがする。

「でも良く見れば黒とか色々あるな」

「引っかかるなよ」

「分かつてるつて」

つかこんな分かりやすい物を含めても遺跡に罠があるってことくらい分かるだろ？ね、コレ世界の常識。

まあアニメや漫画とかなら」「で戻にかかる人が居るけど……」

おしゃべり

「僕には聞こえないよ」

そう、僕には聞こえなし……。水樹奈々ボイスの少女の声なんか聞こえない！！

「…………」さすがに近づいてくるやうな音がするね。

卷之三

こんな厄介事には関わらない方が良い、逃げた方が良いに決まって
いる。

「あ！そこに居たんだ！！」

つて何故か真・ソニックフォームになつてゐるフェイトが居た。
真・ソニックフォームつてSTSじゃなかつたつけ？

僕はバリアジャケットを着てアギトとゴーヴンし、フェイトに背中を向けて逃げ出す。フェイトはそんな僕を見て追いかけてくる、その後ろにはアニメとかによくある巨大な岩の塊が転がってきていた。

「ちよーーー！」ちくんなーー明らかにアンタを狙つてーいるからーー！」

「私だけ好きで」こんな事をしてるわけじゃない！！」

「いや、あんたが罷を」

力チツ

何? 今何押したこの子?

「あんた……おれ」

ビュン！！

やつぱり原作キャラは疫病神だうん！！

「何で罠を押すのかなあ！－かなあ！－？」「

「私だけ好きで押していくわけじゃ……ない」

「泣いたって許しません……」「絶対……」

本当に何で泣くんだよ……僕の方が泣きたいよ……

そう……

「ねえ、何であの辺に攻撃しないの？魔法なら……」

「さあから試してみただけで無効化される」

「マジ？……僕も魔法を上手く使えないと、な

つてそれかな？ピンチじゃない……

「どうにかなうこと……？」

「少しだけなら止めは出来るけど……」

「くそ……それじゃあ黙田……」

アレなら壊せるだろ？今の状態じゃあ出す前に死ぬ……つて

もう行き止まり……？

「嘘でしょ……？」

ヤバイ……だいぶ離れられたけど、潰される……。

くそ……

「くそったれ……」

壁を思いつくり殴る、それで壊せるのであれば苦労は無い……。

ただ音が向こう側まで響くだけ…………。Jの壁の向こうに空間がある?

「Jのなりや一か八かの賭けだ!! フェイト・T・ハラオウン!! 少しで良いからあれ足止めしろ!!」

「え? う、うん」

フェイトが頷き、バルティッシュを転がしていく間に向ける…………。

「すう…………はあ」

落ち着け、アレを出すのには体中が痛くなる…………。まあ今回は命の危険があるからしようがないけど。

理念を捻じ曲げ概念を破戒し理想を夢見現実を逃避…………あらゆる事象を再現し星を田に[与す]。

眩暈がする…………吐き気も今来た。

なんでこんな厨二見たいな台詞を考えないといけないんだよ、ぶつちやけ現実逃避だろ。

太陽に接近し…………繋ぐ。

「ツー! ぐふ」

やば、血が出てきた…………。

体の感覚が無くなつていく感じだ…………体の端から食こちぎられている感じ…………何時まで経つても慣れない。

アクセス完了。

הנִּזְמָן

口から大量の血が流れ出る、それと同時に空間が歪み壁に火がつく。火は捻じ曲がり壁を破壊し吸収して大きくなる、それはそのまま向こう側まで開通した。

「危ない！！」

フェイトが僕を掴んで走る、じつやう向こう側は階段になっていた
ようだ。

ପାତା ୧୫

「た、
助かつた」

本当にギリギリだったこの時からこは原作キャラに感謝くらいこはしても良いだね。

「元はと言えば僕の平穏な日々を壊した管理局の連中が悪いんじや

ねえか……」

「…………何でやつこいつ事を」

「お前等が悪い、ほら、アギトも法えぢやつて……」

服の中で震えてこるアギトを抱きしめる。

フェイトはそれを見て少し心を痛くしたのか辛そうな顔になる。

「…………嫌いなんだね、管理局の事」

「嫌いじゃない、心のそこから関わりたくない、聞きたくない、滅んでしまえば良いと思つ」

これは本心、ぶつちやけ無くなつてしまえば良いとすり思つてゐる。

「そんなに言わなくとも…………」

「嘘つよ、いくらでも…………。田舎あつて一利なしぢやあ無いけど僕にとつては害の方しかない」

「…………」

「あの実験からやつと逃げられたんだ、クローンとしてじやなく人としての幸せを得たいと思つのは当然ぢやない?」

「ツーーまあか……プロジェクトF・A・T・E!—?」

フェイトが大声を上げる…………そりやあねえ…………自分の出生に関する物だから見逃すはずがないよな。

「つっても僕は大昔の人間のクローンらしいから」
でも僕にとつてはどうでも良いことなんだよ……。

「……貴方もスカリエッティの……」
「スカリエッティのせいじゃないよ、あれもクローンだよ。それも
アルハザードのね」

「ツーーー?でも、スカリエッティは罪を!—」

フェイトは叫ぶ、そうでもしないと自分が何を目的に行動してきた
全てを否定されないからだ。

そんな事はしないし僕にそんな発言力は無い、こんなの戯言、いや
戯言以下だ。

「それをアンタが言つ?」の世界を滅ぼしかけたのに

「あ……」

「ハ神はやての持つてる夜天の魔道書の守護騎士達もだ、管理局に
入局したら罪が償えるとでも?甘つたれるなよ、そんなんで罪が償
えるのか?」

そう、二次小説とかではオリ主が守護騎士達は主に命令されてただ
けで仕方なく魔力を徴収していたとかで罪がなくなるのがあるけど
……被害者側から見ればそれは溜まつたもんじやない、はやてもは
やてだ。

自分も罪を被るとか言つてはいるけど犯したのは守護騎士なんだ。

「それに守護騎士は人間じゃない、人間じゃないのに人間の法律で裁くなんて可笑し過ぎる」

「そんな事無い！シグナム達は……」

「悪いけどあなたの意見なんか聞いてない、私から言わせれば貴方も守護騎士達もちゃんと罪を清算してない、ずっと犯した時のままだ」

「きっと自分の目は本当に酷く冷たいんだろ？本当にこんな事は言いたくない。」

「でも一つだけ言っておくよ、生きている限りは罪を重ね続ける事もできるし清算する事もできる……それに死んだら罪がなくなるわけじゃない、むしろ死んでからが辛いんだ……本当に清算したいなら自分の思いで行動しな、生きているんだろ？」

「まあ、アンタは若いんだから地道に考えな。自分自身でね」

「まあ、自分で考えた方が一番良いんだけどね。そう言いながら僕は立ち上がり上を目指す。」

「マナさんのようだね」

「まあこれは余計な事だつたかもしれないけどね。」

「で、到着つと」

「……」

フロイドはすっかり蝶らなくなつた。

まあ言こすあたのが悪いかもしねない、でもアレベリになら反論の余地はある。

でも、反論した所で何かが変わるわけでもない、これは世界の法則なんだから。

それは反論する事が出来るけど変わらない不变。

「何考えてんだ僕は……」

わつわから近づくしたがい考えが変わつてこぐ。

「…………わつわから近づくしたがい考えが変わつてこぐ……」

「……」

「でもや、お前つて子供でしょ。ならもつ少し子供らしく振舞えば良てよ、わつすれば気がつかなかつた物も見えるはずだかられ」

まあ自分の言葉は矛盾だらけだから、そんなに考えない方が良いよ。

「わつ…………よつやく着いたわけだけど…………」

皿の邊にあるのは壁画へのような物だった。

山の上に剣と写輪眼の文様と太陽みたいな物を宙に浮かせている大
様な物が画かれていた。

「何コレ？」

まあ変な物には変わりない、取り合えず写真。

「よし、上手く撮れた」

綺麗に撮れた、けどさっきからフェイトが下を俯きっぱなしだよ。
少しくらい元気にしたほうが良いな。

「お前が今何考えているのか分からぬけど、人間か人間じゃない
かなんて些細な違いだよ。それともなに？お前は自分が人間じゃな
いとか思つてるの？」

「違う……」

「そうだな、クローンは人間だ。人と同じで人を愛せるし憎む事が
出来る。それにアンタは綺麗だからさ、クローンだと知つても好き
で居る奴の方が多いんじやないか？まあそれで皆がお前の事を嫌い
になつても僕は好きだぜ、時空管理局員としてのフェイトじゃなく
フェイトと言う一人の存在が。話して楽しかったしね」

あの後何とか出られた…………まああの壁画の横に階段が合つたからそのまま上つてきた。

「うーん、空気が美味しい……。」

アギトは今寝てこます、フロイトは未だ俯いてこます。

「…………じゃあね、もう一度と念わないと困ります」

そう言つて立ち去つとした、その瞬間バルティッシュ・シュー・鎌バージョンで首を押さえられている。

「な、何を」

「…………すみませんが貴方を時空管理局として…………いえ、フロイトとして保護します」

あれ? ドウシト! うなつた?

「な、何で?」

「貴方がさつとき言った事です、時空管理局に捕まつたら実験されるかもしけないんですね?」

「う、多分そうなると思つ」

この体は唯一の成功作品だし性能良いし…………。

「なら時空管理局としてじゃなく、フロイトとして貴方を保護しま

す。大丈夫、ちゃんと世話をするから

あれ？ 田おかしくない？ 何ていうんだろう？ 要領オーバーでパンクしたと言うような感じだ……。

「あの？ お願いですから逃がしてください？」

「駄目です、私が貴方を守るから」

「ねえこれってスルーしてるよね！ 僕の言葉を返してないよね！」

ヤバイ、本当にヤバイ……。

どうにかしてこの場を離れな……つて、誰だあれ？
弓を構えてこちらを……あの剣でたしか……ツ！？

「危ない！？」

宝具は絶対だと思われがちだが実際はやつではない（前書き）

携帯電話？“じゃ あ書も“ひら”でした。
そして一応転生者も出せました。

宝具は絶対だと思われがちだが実際はそうではない

俺は神崎大輝、所謂チート転生者だ。

貰った物はオツドアイで銀髪、ニコポ、高い魔力にエミヤの無限の剣製だ。だが最初は本当に酷かつた、中身の無い空っぽの物しか作れなかつたからな。

だが原作に関わつてからはちゃんと宝具も投影できるようになった。プレシアは救えなかつたけどリインフォースを救えたのは良かつた。おかげさまで原作キャラにも好かれている。

P・T事件はなのはの味方だつた、フェイト側をについた転生者も居たがあそこまで欲望垂れ流しだとは思わなかつた……。

闇の書事件でも転生者はいた。

両方とも牢屋のなかだけどな。

そもそもクロノをKYOUと呼ぶのが理解できない。

まあ色々あつたが俺はオリ主になつた。

なのは達も俺に優しい、普通に話してくれるし一緒に遊んだりもしている。

だけどフェイトは違つた、明らかに男を避けている明らかに他の転生者にクローンだとか言われて脅されていた。フェイトをハーレムに加えたいけど今ままじゃあ何もできない、幸いフェイトの中で

俺は信頼できる人間らしい。でも今のままじゃあなんの進展もない。どうにかならないかと思つてたが転機が現れた
明らかに原作じゃあ現れない事件が起こつたからだ。
まず間違いなく転生者だろう。

ただ俺はすぐに行けなかつたためなのは達に皆で行けと言つた。

だが逃げられた上相手がアギトを所有していることが分かつた。
俺は急いで地球に戻ることにした、間違いなくそいつもハーレム狙
いだと分かつた。アギトを所有している時点で原作に接点を持とう
としていることが分かる。

そして地球に戻つた瞬間にサー チャーで見つけた、フェイトと知ら
ない奴が一緒に居るのが分かる。
俺はカラドボルグを投影する、だけどこれじゃあ威力が高過ぎる…
…。

そう思つた俺はカラドボルグを地面に突き刺し矢を投影する。
弓は無駄無しの弓フェイル・ノートだ、これなら威力も申し分なくなる。

そして弓を構え、放つた。

僕はフェイトを突き飛ばす、その際胸を触つた。柔らかかつた…

つて違う！

あのオリ主が弓を構えている、地面にはねじ曲がって刺すことにしか使えないような剣、カラドボルグが刺さっている。

フェイトが近くに居るからなのか射てないようだ。

「大輝！？なんでここに！」

フェイトは叫ぶ、どうやら予想外の事らしい。

「ノーブル」

ガキンツ！

刀で射られた矢を弾く、力を使うがいなせないほどでもない。

「……アギト、起きた」

指でアギトを小突く、アギトは少し声を唸らせ田を覚ます。

「ん、どうしたんだよオウカ…… つてなんだよあれ？」

「分からぬ、まああの攻撃を防ぐから早くユーヴンして」

「つてあれを防ぐのかよーはあーまあこいや、じゃ」

「『ソルジャー・ブラン』」

まああれを防ぐのはかなり難しいけど防げないわけじやない、劇場番の Fate ではキャスターが一時的とはいえ防いでいるのが例だ。

「アマノムラクモ、カートリッジロード」

ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ
ヤ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン ガ シ ャ ン !

「嘘！？カートリッジを十個も！？」「

フェイトが後ろで叫んでいるが気にしない、と言つより構つことが出来ない。

刀を鞘に納めて構える、狙いは一瞬……。

「駄目！逃げて！大輝のあれば本当に危ないから！」

フェイトが逃げても良い許可を出した、けど逃げる暇がない。

それはガードリッシュを十個も使ったんだ
た魔力は暴走して体を壊す。
今止めたらいき場を失う

「あー、無理

一応フロイトに返事しておく。集中したまま返答を待つ。

「どうして…？」

「今逃げたらあんたが食らうだろ？」

「確かにそうだけど」

「僕嫌なんだよね、傷つくとしつていながら逃げるのは、例え管理局でもね。まあこれは建前だけどね」

それに……。

「本当はこんな可愛い女の子を一度で良いから守つてみたって感じかな？同じクローンとしてじゃなく一人の男としてね」

「ツー？」

さあて、ようやく準備完了だ。これにつけて勝てなければ俺は捕まつて実験漬けの毎日に逆戻り……。
勝てば。

チート野郎が剣を矢にする。

「蛇竜」

鞘から刀を少し抜く。

チート野郎の手が開き矢が放たれる！

「一突ツ！」

鞘から刀を抜き、接近してきたカラドボルグ目掛けて突くッ！

カラドボルグに蛇竜一突が直撃する。魔力を全て一点に集中させる。

普通はカラドボルグなんかとぶつかり合えばこっちが折れる、実際この前のデバイスならば間違いなく折れてたと思う。

ただこの前の刀を取り込んで以来かなり強固になって切れ味も上がっている。

何かのロストロギアかは分からないけど宝具と打ち合える代物になつてゐるらしい。

それに少しだけ角度をずらしている為真っ向からぶつかり合つわけじゃない。

それにアギトの魔力に聖王の鎧が体を保護してくれる。だけど相殺するには時間がかかる、その間に第二撃が来る。その前にカラドボルグを破壊する必要がある。

その為にも、もう一つのレアスキルを使うしかない。

「……アクセス開始」

体に走る激痛、肉何かにつまんでは千切られるような痛みが走りる。

「ツ！……アクセス完了！」

その言葉の後に炎が走る、その炎はカラドボルグを包み込み破壊する。視界は炎に呑み込まれ見えなくなつた。

「ぜえ……転移魔法……」

自分が立っている場所に魔方陣が現れる、少し時間がかかるとは言え確実に逃げられる手だ。

「……ま、待つて！」

そう言つて僕の手を掴むフェイト……。

なんで掴むの！？って言いたいけどレアスキルの影響で今はしゃべれない。

そして炎が晴れるとチート野郎が紅い槍を弓で射ろうとしていた。紅い槍と言つてもゲイ・ボルクかどうかすらも分からぬ、流石に視力にも異常が来ていたのかよく見えない。

だけど何故か分かつた、あの槍かが非殺傷設定ではなく、殺傷設定でしかもそれがフェイトに当たると言つ事が……。

それが分かつた瞬間僕はフェイトをだきよせる。

「な、何を」

ザシユツ！

「する……の？」

紅い槍はゲイ・ボルクじゃなく、ゲイ・ジャルグの方だった。

「 ッ！！！」

ゲイ・ジャルグは右肩を容赦なく貫く。

肩に走るのは貫かれた痛み。

体が少しだけ動いたのが幸いだったのか、左手でゲイ・ジャルグを掴み捨てる。ゲイ・ジャルグはその直後に爆発する。

そして右肩から溢れる血液を止めることなく、転移した。

旅は道連れ世は情け、そして自分の行いは何時誰が見てるか分からない（前書き）

旅行は楽しかつたです！

ただ外が吹雪いていたけど…………。

そしてベッドで寝ていたら落ちたらしいです。

旅は道連れ世は情け、そして自分の行いは何時誰が見てるか分からぬ

「ぐ、シツ～！」

「動くなよ、包帯を上手く巻けないじゃねえか……」

場所は林、チート野郎から逃げてきて十分、僕は普通の人体型になつたアギトとフェイトに貫かれた右肩に包帯を巻いてもらつていて。血はアギトに治癒魔法を使つてもらい止血した、アギト自身は治癒魔法が苦手らしけどこの体は治りが早い為すぐに治つた。だけど右腕を動かすには後三日くらい時間がかかる。

その為にもホテルを借りないといけないのだが……。

「ねえ、フェイト……さん」

「フロイトで良いよ」

「じゃあフロイト、一つ聞きたいんだけど」

「何? 言える事なら話せるけど」

「僕を殺傷設定で攻撃した人の印象を教えて欲しいんだ、フェイトを含めた全員のね」

そう、これが聞きたい。

チート転生者の殆どは原作キャラから好意を寄せられる。全員から好意を寄せられるのが多いけどもしかしたらあまり快く思つていらない奴も居る筈……。

そいつを味方につけられたらい……、まああくまでも最後の手段としてだが。

「なのははとはやて達は多分、ううん……間違いなく好意を持つてる」

予想は出来てたけど女性陣は敵か……。
だけど男性なら

「ユーノやクロノ義兄さんにザフィーラも信頼できる最高の友人つて言つてた」

駄目か……、これは予想外だつたな。

ユーノを淫獣、クロノをＫＹとか言つて毛嫌いしてるかと思つてたけど……。

さつきの事もあるけどフェイドも……。

「私とアルフ、まあ私の使い魔なんだけど……あまり信用してない

……

それは以外だつた、まさかフェイドがあまり信用してないとはね、アルフはそうでもないけど。

「へえ、どうして?」

「……昔私が関わった事件、まあ私のお母さんが起こした事件なんだけど」

つまりP・S事件の最中、もしくはその前後か……。

「続けて」

「うん、私が来たばかりの頃にアルフと一緒に町を歩いていたんだ

「それで？」

「……アルフが血の臭いがするからってその場所に行つてみたら

あ、成る程……分かった。

「人を殺していたと

「うん……」

で、それを言おうにしても証拠が無い。

それに信用されている男が殺人等と言つづけた事をする筈が無い、
と言われるだけだ。

「まあそれじゃあ信用するなんて無理だわな」

そりやあ無理に決まってるだろ？、殺人を犯した相手を信用しようと
言う方がヤバイ。

一般人がアニメや漫画を見て共感するのとは違い、実際に起きた事
件で私利私欲の為に殺したとなれば信頼なんて失せるに決まっている。

「はあ……、かなりヤバイな……」

「このままじゃあ本格的にやばいからな。

「…………ねえ、時空管理局に捕まればなんだよね……」

「へ・まあやうだな

「どうしたんだ? フューティー……。

「ならん」

僕はこの後フューティーが言った言葉に度肝を抜かれた。

「…………確かに、それなら…………でも…………僕も危険だしフューティーも巻き込むことになる」

「つづん、私達が貴方の事を…………それに殺傷設定で放つた事もあるから…………」

「ああ、しようがない…………今はフューティーの話の事を聞いてる」

「アギト、嫌かもしれないけどフューティーの話とおつにしよう……

「……」

「私はロードの話の事に従つだけだ! それこの金髪は信用できる

「!」

「どうやらアギトに気に入られたようだね

アギトが管理局の人間なのに懐くなんて珍しい、でもフュイトは信頼できる。

だからなのかフュイトと一緒にいても嫌な感じはしなくなった。

「……そういえば何で私達の名前を知つてたの？なのはなに女つて

「ああ、アレは脅しやすくなる為に言つただけ…………名前は研究所で」

本当にこういつだけは便利な研究所、その名前を出すだけでフュイトは少し辛そうな顔をする。

まあ本当は前世のテレビで…………そういや何時見てたんだっけ？まあコレだけ長い時間が経つていれば忘れるよな。

「じゃあ…………これからよろしく、フュイト」

「うん、よろしくねオウカ」

「フェイトちゃん……大丈夫かなあ？」

なのはが心配している、だが大丈夫だ……フェイトはあの野郎に放ったカラドボルグの衝撃でぶつ飛んだ筈だ。最後に放ったゲイ・ジアルグ以外は非殺傷設定で放った、アイツの死体が発見できなかつたが直撃した証拠に地面には血があつたからな。

「たぶんな、アイツが非道な事をしていなかつたら大丈夫だ。それにフェイト程強ければ戦いだつて持ち込めるはずだ、その時に魔力を探知できれば」

「うん……そうだよね」

「どうやらその転生者はかなり酷い奴らしい、ヴィータを迷い無く気絶させ人質にした。

それにそんなに酷い奴にフェイトは惚れない筈だ、ハーレムを狙つて地球に来たんだろうが惚れるわけ無い、馬鹿な奴だ。

「なのはちゃん、大輝君！－フェイトちゃんからの通信が来たで！」

お、はやてが来た。

それにフェイトからの通信も……どうやらアイツと一緒に居ないようだ。

「だけどな……暫く戻れそうにならぬわ」

「はっ？」

俺ははやての口から放たれた言葉に度肝を抜かれる事になる。

「ふう、これでよし」

「でも本当に良いの？ フェイトまで巻き込む事になるけど」

「良いよ、それにあくまでも私の言つことに従つていれば大丈夫だから……」

フェイトが出した条件、それはフェイトの近くに居る事。

そしてあのチート野郎が殺人、もしくは殺人未遂の証拠を掴む為に協力すると言う事、アッシュが僕の肩を殺傷設定で攻撃したという事だけではまだ無理らしい。と言うより証拠が上手く取れなかつたらしい。

そして僕を使って証拠を掴むと……、つまり僕は魚釣りの餌ですね分かります。

でもフェイトに協力する代わりに僕とアギトは事実上管理局の預かり扱いになっている。

フェイトの近くに居ないと駄目になるが管理局員が来てもフェイト

に守つてもらえる、まあ持ちつ持たれつの関係になると云つ事だ。
だが所詮形だけ……、あのチート転生者が何か言えば原作組みは
僕を襲うだろ？

「でもその服じゃあ……」

「……あー、確かに」

今の服は言つてしまえばかなりボロイ、基本魔力を頼つていたし一
人暮らしだったからこの服しかない。

「……取り合えず服を……」

「お金ならあるけどね」

そう言つて札束を出す、換金していない宝石なども含めればかなり
の額にはなる筈。

「……お金持ち？」

「まあ一応富豪並にはあるけど……」

「……取り合えず行こう」

そのままフェイトに連れて行かれ服を四着ほど買った、安い服にし
たかったが結構高い服になつた。

そして何故かフェイトの服も……ぶっちゃければフェイトの服の方
が……、一応人間サイズのアギト用の服も買った。

「じゃあ次はご飯にしよう

「……まあ出費がでかかったのはじょいがないよな」

僕の服の出費だつたわけだし、フロイトとアギトは女の子だ。
服は多い方が良いだろ？

ともかく、よつやく飯だ。

既に日は暮れ始めているし……、長く居すきると警察が職務質問
とかしてきそうだからね。

そう思いながら歩き始める。

「ヤレ」のお嬢さんたち

現実で変なおじやんに話しかけられたら逃げる、相手にとって男も女も関係ない

sts編をやる方が迷っています…

現実で変なおじさんと話しかけられたら逃げ、相手にとって男も女も関係ない

「セー」のお嬢さんたち

いきなり僕達は変なおじさんに話しかけられた。

初老の男性できっちりとした正装、白髪で威風がある髭等が只者ではない雰囲気を出していた。

だけど攻撃的ではない。

「何ですか？」

「占いをやつていかんか？ 今なら口ハでやつとるやん

「やります」

口ハ、つまり無料、只だ。

やつておこして揃は無い、占いにいつのまばたきの所詮英氣を養つ為に行つ物だ。

それに良い気分になる。

「金く……」

「占いつとも乗り気だねフュイト」

アギトも面白がっている、女の子大好きだからね~「占いの……」
「フュイトとアギトも立派な女の子だつたつて言つ事が……」 関

心関心。

……そう思つていたら一人から蹴られた、何か失礼な事を考えたとかいつてた……なんで分かつた？

「ホホホ、元氣が良いの。どれ、手を出してみんしゃい」
なるほど手相占いか……信憑性なんて全く無いけど一番知られているメジャーな占いか……。

そう思つてるとフロイトが手を出した、初老の男性はそれを手に取
り……

「ホツホツホ、若い娘の肌は良いの」

「真面目にやれ……」

「のむつむつ本当に占い師か？もう変態しか浮かばねえよ。

「スマンスマン、本当に占いのむつモソンじや」

そつまつておつさんは皿を出し水を入れる、そして何かが入つている袋を出す。

「これの中に入れてみれ、これが占いじゃ」

聞いた事も見た事も無い占いだった、いや……探せばあるかもしないがこんな占いは憑依前でも見たことが無い。

「いなんのが？」

「まあやいわいいよ」とこじつや…………」

「おひさん変だ、でも懸念は無い…………まるで子を見守る親のよ
うな感じだ。

そう思つていたらフュイトが袋から丸い物を取り一つ入れる……水
の色が変わり始める、色は青。

「ほお…………青か…………」

「…………これって色を占うとですよね？青はどんな意味を…………」

フュイトが真剣に聞く、本当に女占うと占いが好きだなあ…………。

「これこれ、急かすんじゃない…………お嬢ちゃんは過去、未来、現
在…………どれが良い？」

おひさんがフュイトに質問する、でもなんでその三択なんだ…………。

「私は未来です」

「その理由は？」

「私には一緒に居て楽しい友達がいます、その人たちと一緒に未来
を歩みたいからです」

「やうかやうか…………」

おひさんはフュイトの答えを聞いて頷いている。

「じゃあ占いの結果じゃ……お嬢ちゃんには死んでしまった姉の
ような人があるのね」

「え！？」

このおっさんはフェイトに姉に近い人がいるのを断言した。何故かは分からぬけどこのおっさんが少しだけ怖くなつた。

「何で……その事を」

「その様子からするとあたりのようじやな」

「……はい」

「その死んでしまった姉はいつでもお主の事を見守っている、と言つておるのよ」

「…………… そうですか」「

「幸せになつて欲しいとも語つてある、私の分まで幸せになつてと

111

フェイトの頬からは涙が零れ落ちていた。

そして確信した、このおっさんが出で師ではない事に……。

「おうござ、マーマン。」

「昔はな、色々と見えるんじや、近い未来とかものお

なるほど、だからか……上いではない予知。

「まあ絶対ではないがのぉ、千回に一回は外れるからのぉ」

そして高確率で成功する事が分かつた。

「それじゃつきの続おでのぉ、フュイトよ……血鳥を持って、たまには素直になつてと書つておる」

「はい……はい……」

フュイトが泣く、両の手で顔を抑えながら……泣く。

「次は小さなお嬢ちやんじや」

「ねい……」

そつまつてアギトは袋から取り出し一つ入れる、色は赤。

「赤か、お主はどれが良い?」

「あたしは過去だ一色々と辛かつたけどオウカと一緒にたからなーーー!」

「ほお、お主はオウカが大好きなんじやな

「ああーーー!」

アギトが嬉しい事を語ってくれる、本当に嬉しい。

「こんな僕を好きと言つてくれれるのもアギトへりこだらわ。

それにしてもフェイトは泣き止まないな……。

「なあ、フェイト……胸へりこは貸すナビ」

「…………ありが、とひ……」

そつ言つてフェイトは僕の胸に顔をつける、そして泣く。色々と溜まっていたのか？原作じやあ闇の書に取り込まれた時に解決したはずなんだけビ……。

もしかしてあの野郎が邪魔したとか？全くいらない事を……。

「良い雰囲気じゃが、次はお主の番だぞ」

「あ、ああ」

何時の間にかアギトのは終つていたし。

アギトの顔を見ると僕の服を掴んでいる、何を言われたんだ？

そう思いながらも袋から取り出し、水に入れる。色は変わらず透明のままだつた。

「ふむ、なるほどのお主はどれじや？

「僕は…………現在かな」

「何故じや？」

「…………僕は未来はすぐにやつてくるし過去も永久に来る、なら現在

は一瞬しかない……だからです

「やうか……」

おっさんはそのまま優しそうな顔でこっちを見る。

だけど口は何かを躊躇んでいる、言つべきか言わないべきか……。

だけど何かを決心したのか口を開く。

「お主はいざれ自分の矛盾を見つける、そしてその矛盾が無くなつた時……お主は全てを知る」

おっさんの言葉の意味が分からなかつた、けど将来何かがあると言う事だけは分かつた。

「…………それだけ？」

「いや、むしろ…………お前さん、何か写真のような物を持つてないかい？」

写真？ そういやこの前撮つたつけ？

「あるけど……」

「それを見せてみい」

言われるがままに出して見せる。

「…………この写真の場所以外にもこれと同じ物が後三つある、そこに行くと良い」

「その場所つて？」

「この場所以外にも同じ物が？気になるから行って見たい」と思つ……
…それに何故か知らないけど惹かれる。

「滋賀県にある琵琶湖、北海道にある洞爺湖、そして最後に行く富士山」

「なるほど……」

確かに言つてみる価値はありますだね。

「でもなんで富士山が最後？」

「セリヒリの物を持つて行く必要があるからじゃ、詳しく述べからんが夜明けじゃないと意味が無いらしい」

何かあるのか？でもまあ行つてみる価値はありますだな。

「わづか……じゃあ行つてみるよ」

「ホツホツホ、氣をつけてなあ」

取り合えず行く前に食事を取らないと……。
そつ言つて一人を一緒に連れて行く……そうだ……

「おっさんも一緒に」

後ろを振り向いた時、既におっさんは居なかつた。

女の会話（前書き）

今回も厨二に「都合主義」。
できれば主人公を不幸にしたい！

次回は外伝やります。

「…………なんだつたんだあのおつせん」

あの後探したけど結局見つからなかつた、でも何で急に消えたんだろうか…………？

転移魔法は…………違う、それにあれば時間がかかる。レアスキル…………多分それだと思う。魔力は多分無かつたと思う。
まあいいか…………、不思議なおつせんだつたけど悪い感じはしなかつたし…………。

「それよつも…………」

「何を食べようか…………」

ぐ～、と腹の音が鳴る。やつせんせんば今日は朝しか食つてない…………。

出来れば魚料理じゃないものを食べたい、肉とか野菜とか…………。
ぶつちやけ中華を食べたい、だけどここにはレストランアーストという事でフュードに食べるお店を選ぶ権利を譲りうつと思つ。

「ねえフュード、何が食べたい？」

「私はいいよ、オウカが選びなよ」

「いや、ソレはフードイトが……」

「いや、ソレはオウカが……」

お互に譲り合つ、でもフードイトが良いと言つたから選まつかな。

「なあオウカ、フードイト……」

そつ思つていたらアギトが僕の服の裾を引っ張つて声を上げている。

「どうしたのアギト」

「私あが食べたい……」

そつ言つてアギトが指差すのは日本の文化、そして外国にも知れ渡る由緒正しいジャパニーズフード寿司。
どうやら僕は今日も魚料理以外を食べられないようですが、くそ……
こうなりややけ食いだ！！

そう心の中で呴きながらお店に入った、お店の中は一般的な回転寿司。

行列は無かつたが混んでいた為十分くらい時間がかかるらしい、席が空くまで椅子に座る事になる。

その間にフードイトと少し話をしよう。

「そついやフードイトってかなり綺麗だね、それに可愛いし

「…………か、可愛い？」

少しだけ、顔を赤くした。

まあ素直に褒めているからね、僕は鈍感でもないしそれ位の事は分

かる。

「きつともてるんだらうね」

「……大変だよ、もてるのうて」

フェイトが何か色々と諦めたよつた顔をする……。

「な、何があつたの？」

「変にイケメンな人とか女顔の人に毎日のように『俺の物にならな
いか?』とか言つてくるし……しかも凄い大声で『嫁キター!』
とか言うんだよ、街中で」

「うわあ……」

「そりゃあ酷い……」といつより現実に居たんだな、そんな痛い奴……。

「嫁キター!」

……………実際に居た、そして今僕の目の前で起きたよ。今明らかにこ
つちを見て変な大声をあげる物凄い残念なイケメンの男がこつちに
近づいてくる。

フェイトの顔が青ざめている、アギトもなんか汚物を見るような目
でその男を見ている。

周りのお客さんも何事かと男を見ている、男は顔を赤らめてこつち
に、正確にはフェイトを見ている。

「本当に居たんだね、半信半疑だつたけど……」

「……うん」

フェイドが嫌そうな顔をしている、と言いつゝは変な物を見る目で見ている。

「フェイド、あれ殴つて良い？」

フェイドが可哀想になつたから、本心は目障りだから殴りたい。そして視界に一度と入れたくない。

「……」

無言のままだ、それだけ嫌なんだろ。ついでに、その男の前に立つ、僕より頭一つ大きい男はフェイドに近寄る。するが僕が遮る。

「おい、邪魔ッ！？」

最後まで言わせることなく水月に拳を入れる、男は腹を押さえながら僕の肩を掴む。

力も全く無い、鍛えてなかつたんだろう。

「て、てめえ……！」

「うぬせー」

次は金的。

「あひい！？」

「もう眠れ」

そして最後に顎にアッパーを決める。
男はそのまま倒れる。

僕はその男の足を掴み外に出て辺りを見回す。
そしてある人を見つけその人の所に行く。

「あの～、すみません」

「あらあ～？ 何かしらボクウ～」

服の色がくどく文物で、不自然な金色の長髪に化粧しているが目立つ
つ顎鬚の男性。
つまりオカマに話しかけた。

「この人が貴方に惚れたとか言つっていたので」

「アラア～！－嬉しいわねえ～」

「それで目が覚めたら貴方と言えない事をしたいと言つていました、
目が覚めたらで良いですが」

「本当なのあ～！」

「ええ、ですから預かってください～！」

「分かったわ～、貴方もど～う？」

「僕は遠慮しておきますよ」

そう言って立ち去り、すし屋に戻る。

そして何事も無かつたかのようにフェイトの隣に座る。

「……大丈夫だつた？」

「ハハ、ああ、おのれを制御で飛ばしのんこ度しておいたか」

『な！誰だアンタ！？』

『あら～、照れちゃつて可愛いわねえ～』

『アーティストの才能を発揮するためには、必ずしも才能があることが必要だ』

四

外からさつきの男の声とオカマの絶叫が響いた。

「……大丈夫だから」

「絶対に大丈夫じゃないと思う」

フェイトは優しいなあ、アンナ奴を心配するなんて……。つかお店

のなかで大声あげる？普通。
つとそだそだ。

「フロイト、これちつきの奴が持つてた物

そつぱつて一つの畳を渡す、その石は綺麗に光る石だった。

「ツーーこれひでトバ」

「しー.....」

「（）せん.....デバイスだ.....なんで持つてたんだろう」

「分からないけどフロイトに渡した方が良いこと思つて持つてきておいた」

「うそ.....だけどなんで管理外世界にデバイスが.....」

それは恐らく転生者だからです、すみません。

同じ転生者として恥ずかしこ.....、一步間違えば僕もあんな風に

.....。

「まあ良つけじゃ、席空いたみたこだよ」

「あ、うそ」

そつぱつてフロイトとアギトと一緒に立上がり。

場所はカウンターで三席空いている、そしてその席に座る。順番は右からアギト、僕、フロイトだ。

そして会話をしながら寿司を取つて食べていく、焼き魚や刺身とは違つた美味しさを楽しめた。

そのまま時間をかけたいらげ、そのままお金を置きを出る。

その時に白目を向いていたさつきの男がオカマに何処かに連れて行かれていたけど無視した、もちろんフロイトやアギトには見せないよつこした。あれは刺激が強すぎる。

「で、寝る場所何処にする？旅館？ホテル？野宿？」

「何で野宿も……」

「まあこれは最後の手段だから気にしなくて良いよ

「…………じゃあホテルで」

「了解、でもどうするの？男と女じやあ同じ部屋を借りるのはちよつと……」

「流石にホテルの部屋を子供が一つ借りるのはちよつと気が引ける。まあ僕は野宿でも構わないけど。

「ううん、部屋は一緒に借りるよ

「は？」

「何で？僕男だよ、女顔でも男だよ。それに体格だって良いし……」

「オウカがそんなことしない人だって信じてるから

いや、僕は貴方が思つほど綺麗な人間じやあありません。

「だからって……」

「それにアギトも居るし」

「大丈夫だぜー。オウカは信頼できるからなーー。」

「いやでも……男と女とか……」

「じゃあ行こう」

「話を聞いて」

結局僕の話は聞かれる」となくそのままホテルで一緒に部屋で泊まる事になった。

「全く、こんなのがいやあ」と都合主義だ

お風呂に響くのは嘘。

ビジネスホテルにある風呂を使っている、お湯の温かさが体に染み渡る。

「…………髪長いな…………」

何年も切つていなかつたらこうなるか……、短くしようとつ。前世のよつて、前世はどんな髪形してたんだつけ。

まあ何年もたてば忘れるよね普通。

『……で、何で一緒にホテルにしたんだ?』

外からアギトの声が小さいが聞こえる。
少し静かにして聞く、アギトはあんな姿をして子供っぽいがこの体
よりも長く生きている。
もしかしたらフュイトよりも年上かもしれない。

『……なんていうのかな?』の人はそんな事ないと思つたんだ』

信頼してくれるのは本当に嬉しいけど僕は貴方が思うほど優しい人
間じゃない。

『でもさあ、オウカが言つてたけど男と女だよ、それに性格少し変
だし』

否定はしないけどアギトが裏で僕の事をどう思つているのか分かつ
た、否定はしないけど。

『まあ確かに性格変だし容赦ないけど…………』

酷い!…出会つてから一日も経つてないのにそんな評価をするなん
て!!

『……嫌な感じがしなかつたんだ』

『嫌な感じ?』

『うん、さつきの男の人が良い例だけど…………大輝が殺人をした所
を見た後に逃げ出したんだよね』

今フェイトの昔話を聞いている、と言つより何でこんな重い話に？

『その後魔導師に会つたんだよね、何人ものね。その全てが協力してやるとか言つて……嫌な感じがしたんだよね……私を物のよう見ているとか……そんな目で』

また転生者が……つーか馬鹿ばつかだなあい……。

『しかも全員が戦いだして……アルフと一緒に逃げて……なのはと会つたんだ、その時も大輝と会つて分かつたんだ、酷い目をしているつて』

『そりが……』

『それで大輝とだけは距離をとつてるんだよね、だけどたまにカッコいいなと思つちゃう時がある……』

大輝はニコポ、もしくはナデポを持つてゐる。
だけどフェイトはそれを自分の思いだけで跳ね除けてるんだ。
ニコポやナデポは誰だらうと惚れさせる能力だと思つてゐるけどそれは違う、主人公に憎しみを持つたまま死ぬ敵キャラも居るよう用心で決まる。

言つてしまえば心の持ちようでは耐えられる、だけど大半が気付くことなく墮とされる。

フェイトはそれに無自覚ながらも気付き耐えている、凄いと思つ。

『だけどね、その度に思つんだ……なんで人を殺したのつて……』

……』

『そりが…………』

好意を持つていても失望する、フェイトが墮ちないわけだ。

『それに自分が自分じゃなくなる感じが嫌だった、そして許せなかつた…………なのは達には表面だけよく見せて隠れて酷い事をしている大輝が…………』

どれだけ表側を良くしたって所詮は偽りの物だ……いつか剥がれ落ちる。

たとえ酷くても本性を出しておけば良かつたんだ、あの野郎の力なら不条理を変えることも出来る能力がある、フェイトも裏切ることは無かつたのに。

『まあその点オウカは隠すのが下手だしな、すぐに顔に出来るし』

『え、そんなに出てたの？僕つて…………』

『うん、ユーノや義兄さんのように嫌な感じはしなかつたからね
いや、だから僕は…………』

『それに一緒に話していく楽しかった、言葉は色々と矛盾してたけどね』

『そりだな、ハハハ』

「僕つて…………僕つて…………」

僕は周りの人からヘタレとでも思われているのかなあ…………。

P.V五万達成 小学校（前書き）

本当は三万の予定でした。
でも書いてる途中に……そして短いし意味不明です。
それでも良かつたら見てやってください。

あー、暇だ……。

僕こと高町オウカは転生者だ、正確には憑依者が合ってるけど。
一応リリカルなのはの世界、僕のほかにも転生者は居るけど……。
全員チート能力もちなんだよね……。

高町の姓を名乗っているけど実は養子、理由は実験が嫌になつて逃げ出したらフェイトに助けてもらつたこと。

本当はハラオウン姓になる筈だつたんだけど高町親子に引き取られた、なのはが弟欲しいとか言つていたからとか……。
僕つて弟？

まあチート転生者でオリ主である神崎大輝には絶賛睨まれ中です。
ヤバイです、朝っぱらから僕の胃袋が破れそうです。そうなつたら
胃液が肉にかかるて痛そうだなあ……。

そんなこと考へてたらフェイトが近寄つてきた。

「お早う、オウカ！」

「お早う、フェイト」

フェイトが笑顔で僕に挨拶する、僕もフェイトに挨拶する。
にしても本当に可愛い笑顔だなあ……。

「席に着いて下さご、HRを始めますよ」

先生の命令で生徒が席に座る。

「つして、今日も一日の生活が始まる。

「俺と戦え！高町オウカ！！」

あれ？びっくりひなつた？

今は体育の時間、何をしていると思います？

ドッジボールです、はい。それでフェイトに応援されました。

あ、理由分かった。

「えー！…嫌だあ！…」

まあこじはは下供っぽく……。

「どうせ僕が勝つもん」

「…大輝、お前に味方しよう」「…

あれ？何で？手つ取り早く済ませつと思つたの……

「いや、今の言葉が原因だからね

あ、また口が滑ったのか……。

はあ、面倒くさい……海に潜りたい……。

「それじゃあ試合開始！」

ああ、先生！お願いですから試合だけは……

「はあ……なんでだろ？」「

「くそ……くそ……」

向こうのチームが僕にしか狙わなかつた為こつちのチームの被害は少ない、それに対し大輝のチームは大輝一人しか残つてない。

向こうは転生者と言えど体はただの人間、でもこつちはクローン……しかも生まれる前から強化されている。

やつぱり基本性能の差つて大きいよね、戦い方以前に。

「じゃあこれでお仕舞い

やつぱり投げる……。

これでやつと終われる。

はつ？今何言いやがつた？

しかもキヤツチ、あんにやろつチート能力使いやがつたな。

「はっ！ 勝負はまだこれからだぜ！ 」

そう言つてあの馬鹿がボールを投げる、それをかわす。

ゴッ!
!!

גַּעַמְלָה ג

後ろの少年がぶつ飛ばされる、ちよつと待て……ボールにも強化してんの！？

卷之二

「お前には勝つ、それだけだ」

本当にこいつオリ主?

なのは達も少し驚いているぞ。

「がんばつて！！！オウカ！！！」

フェイトが僕を応援してくれるのは嬉しいけど……。

「まあ勝ちに行くか……」

少し卑怯だけだ。

「来い、次お前が投げた時が……最後だ」

かつこつけてるな……。

「まあ良いか

そつとつてボールを投げる、ボールはさつき投げた速さより少し遅い。

「馬鹿か？ 何で少し遅く……」

そしてボールは大輝の手に収まる…………瞬間に落花した。

「なつ！？」

落花したボールはそのまま大輝の足にぶつかり地面に落ちる。少しの間周りが静かになるがすぐに歓声になる。

「すゞー！ チェンジアップじゃねえか今のーー！」

「俺達の勝利だぜ！ー！」

「あの大輝に勝つたんだーー！」

周りが喜んでるナビ、向こううせ……。

「やっぱり大輝じゃダメだよなあ

「性格やルックスは勝ってるのになあ

「なんでフロイトさんはあんな奴に」

「くそ！…何で負けたんだ！…」

結局いつもなると……、なんか勝つた気がしない。

「はあー……今日もめんどくさかった」

「もう言わないでよ」

放課後になつて掃除しフロイトと一緒に帰る、何も変哲の無い日々。

「フロイトも俺より大輝の方が良いんじやない？」

ふいにこんな事を言つてみた。

「……大輝は何か変」

「何か言つた？」

「何も言つて無いよ

「…………なんだ夢か」

目が覚めるといつもの岩肌が見えた。

「もしも僕が原作キャラに会っていたら…………まああくまで可能性
か」

それよりも先に殺されてたと思つ。

「おーい！…起きたかオウカ！…

「うん、起きたよ」

そうだ、あんなのは夢だ。

僕が原作キャラに会えるわけ無い、今おうとしてても殺されるだろ
う…………。

まあ向こうから来ない限りは……。

それから数日後、僕は原作キャラと転生者に会いつたとなるの
だが……。

旅に必要な物は移動手段と追跡者、追跡者は要らなくない？

「ふつーふつー！」

いやー、朝から素振りって言つのは良いね！体を動かす事は本当に楽しい、できれば海に潜りたいけどここに海は無い…………残念だなあ。

まあ良いか、すつきりしたし。

「戻るか」

そう言つてビジネスホテルに戻る、その時に昨日居た転生者に会つた。体中にキスマークが付いていて死んだような顔をしてこの世の終わりのような顔をしていた。

しかも服が所々破れていたり変な液体が付いていたけど…………。

うん、何があつたんだろう。

でも僕のせいじゃないよね、うん。

そんなことを考えていたら何時の間にか自分の部屋の前に来ていた、テンプレならここで着替えていると言つ感じだけど…………そんなことはあり得ない！！

「…………ただいまー」

扉を開けると布団に入つて何かを見ているフェイトが……。

「あー、うんお帰りオウカ……」

フェイトは見ていた物を隠しごつちを見た、明らかに動搖していた。

「何を見ていたの？」

そう言つてフェイトに近づく、それに反応してかフェイトが後ずさりをする。

「べ、別に何も」

「あ、胸の谷間が見える」

「嘘ー？」

ふ、引っ掛けたな。

フェイトが右腕で胸を隠してゐる隙に左腕に持つてた物を見る。

「だ、騙したーーー？」

「騙される方が悪い、とは言わないけど」

そう言いフェイトが見ていた物を見る、それは写真だつた。
写つていたのは十人程度の科学者…………つて……。

「これまだあつたんだ」

「これは一番最初の頃の……僕が作られた一番最初の頃の科学者達だ。

「この頃はまだ酷い実験じやあ無かつたな……それに人間扱いだつたし」

「……ああ……」

何時の間にか居たアギトも頷いていた、この頃はまだ楽しかつた。

「……オウカ……この写真の人たちは……」

「ああ、僕を作った科学者達だよ……今じゃあ一人しか生きてないと思つけど」

「……昨日言つていたマナさんつてこの人?」

フェイドが指差すのは一人の女性、綺麗な薄紫色の髪に橙色の瞳、目は鋭いが写真でも伝わる優しそうな雰囲気がある女性。

「……そうだよ、マナ・リルクライト……僕を作り出した研究の第一人者……そして僕のお姉さんだつた人」

「……本当に優しかつたな……私もこの人に助けられたんだ」

この時はあくまでも作る事だけだった、聖王を復元して……ちゃんとした大人に育てるという感じだつた。

「うん、作られてから一年間は本当に楽しかつた……あの事件が起きた前は

「あの事件……？」

「……聞きたい？」

「……うん」

「そつか、じゃあ……次回に続く」

「何でー?」

「この話はあんまり言いたくない、同情されるのが嫌なのもあるけど絶対に止められるから……」

「本當ならずつとここに住んでいる予定だつたけど……管理局預かりになつたから関わらないといけないのか、僕がフェイトにスカリエッティの事を被害者とか言つてスカリエッティに恨みが……無くなつた? わけじやあ無いかもしけないけど……まあ結局僕がフェイトに言つ資格は無かつただけだ。」

「……それよりも

「ついでに買つててきたサンドイッチと牛乳を渡す。」

「朝、」飯だよ

朝食を食べ終わった後ビジネスホテルから出て街を歩いていた。正確には歩いて隣町に移動するのだが……。

またあの転生者に出会った、だけどもう一度と使い物にならないだろつ……あのオカマと一緒に手をつないで歩いていたし、何か目が真っ白い粉を使ってる人みたいに逝っちゃった目で笑っていたからな……。

「えへ、へへへへへ……」

顔を出来るだけ会わせない様に歩いてその場から100mくらい離れたらフェイトが口を開いた。

「何で昨日絶叫が聞こえたのか分かったよ

いや、僕には分からない……チート能力があるのに何で魔法を使えない一般人に負けたんだろう……。
デバイスが無くても能力が……そういう二コボやナデボって男にも効くんだっけ?
効いたらいやだな……。
つて……

「……フェイト、少し走るよ……」

「え?」

僕はフェイトの手を引っ張り人通りの多い道に行く……。

「一体どうした

「管理局の白い悪魔、キング・オブ・モンスター高町なのはに管理局の若理事八神はやてが居た」

「……その二人の名称についてどうかと……」

「でも結構呼ばれてるよ、科学者達も言つてたし」

フェイントは僕が今言つた言葉に苦笑いする。

「でもなんで人通りの多い道に?」

「理由は二つ、人通りの少ない道に行けば見つかる可能性が高いから」

人通りの少ない道って人が少ないので分かりやすいし、行き止まりがあつたりする。

そうなると即戦闘勃発、僕はあの一人なら戦つて勝てる自信があるけど……。

「それに管理局のオーリーシュ、妬ましいぞこのハーレム野郎事神崎大輝も居たし……」

「……一応聞くけどその異名つてオウカが考えた事じゃないよね……」

「いや、マジで僕じゃない……フェイントにも異名が」

「聞きたくない」

「だよね」

「まあもつ一つの理由は木を隠すなら森の中、人を隠すなら人の中つて言うわけ」

「まあこじんだけ多ければ分からぬだらつ、小説や漫画なら分かるだらづだ……」

「でも少しくらこは変装した方が良いかなあ?」

僕はそづきと足でこの場から立ち去る。

その後見つかる事も無く何とかバレずに隣町に行く事が出来た。

「……疲れた……」

本当に疲れた、周囲を警戒しながらこじんに来るのこは本当に神経使つたし何より遠かつた。
他の移動手段があれば……。

「あ、これ良いな」

目に止まつた物は自転車だつた、何故か惹かれる……訳じやないけど何故か欲しい。

それにデバイスの中に収納できるし……うん、これ買おう。

「すみません」

そう言つてからお店の中に入った。

「いやー、楽だねー！歩く必要ないし頑丈だし」

「かなり高いのを買つたからだと想つんだけど……」

フェイトが僕の買ったもう一つの自転車に乗つてゐる。アギトは小さくななりフェイトの服に入つてゐる。

そして何故か寝息まで聞こえる、アギトってあんな性格してこるのによく寝るんだよなあ。

「わひと……、」JACKから一番近いのが、……琵琶湖だったよな

ポケットから取り出すのは//ズのよひに汚い字で書かれたメモ。

「じゃあ行くよ、フェイト

「うん、分かった」

今思えばたつた一日の出来事だった、たつた一日で原作キャラに会い神崎大輝と戦つて……本当に何でこうなつてしまつたんだろう。

「あ、道逆だ」

旅の途中にストラップがあるのは常識? (前書き)

疲れた…………豆腐になりたい。

stitch編どりしそう…………。

原作どおりやるかオリジナルでやるか…………。

旅の途中にトラブルがあるのは常識？

はあい、M.Y自転車・命名プロミネンス号を買った僕はただいま……。

周りにある風景は森、地面はぬかるんではないが水気を帯びている整備されていないでこぼこだ。しかも雑草大量に生えていたり石やら岩やら大量にあり木もかなり生えている。

それで地面は斜めに……場所は山。

賢い皆様なら分かりますね、僕達、……

遭難しました。

「やつほーーー！」

「やつほーーーじゃないよーー何遭難してるのーー?と云ひより何で私達はこんな場所に居るのーー?」

フェイントが壊れた、まあしょうがないか……。

「あんな事があつたからね…………」

「…………何」

「まあフュイトはさつきまで氣絶していたからね…………、僕も聖王の鎧が無かつたら骨が何本か折れてたし…………」

「まあぶつちやけフュイトの自転車がスリップして一緒に投げ出されて僕がフュイトを庇つてそのまま落ちた」

「じゃあつまり」

「今回もフュイトが悪い」

「今回もフュイトもしかしてあの無人島の事も含まれているのー?」

「いや、遺跡の罠」

「…………私つてドジなのかなあ」

「まあ嘆くな、皿転車は無事だつたんだし…………。でもまあ…………。

「「」の山を下ればきっと琵琶湖に着くはずだから…………多分」

「そんなフォロー要らなによ…………」

「やつら」

まあ何となくだけ山を下つてこけば道には出るはずだ。樂觀視し

ても良いんじゃないの？

そう思っていた時期がありました。

それから数時間後……まだ山の中を下っていた。

「ねえ……やつぱり怒って良い？」

「…………」「めん」

「メンで済むなら警察は要らない、少しでも楽観視した自分とあんな所で転んだフュイトを殴りたい。

「はあ……今日は野宿か……」

フュイトやアギトには悪いけど今日は風呂無しで我慢してもいいねつ。

「まあもつ少し先に進んでももつひとつだけ平らな地面を見つかるまで歩く事になるけど」

大丈夫だよね、と言いつつアギトを見る。
フュイトは顔を逸らして頷く、人の話を聞くときは顔をこつこに向けなさい。

怖くないよ？ねえ、怖くない？

「いや、今のオウカ……メッチャ怖いから、夜に怖い物とかに会った時のように」

アギトがフュイトをフォローす、だけどねアギト。怒るとやばいよ

つちつ怒りなこといけないんだよ、だよ?

「…………やアギト一年前に」

「「あん、フロイトが悪いです。怒つてやつてください」

「アギトー?」

フロイトはアギトが裏切ったので驚愕する、残念だったな……アギトの黒歴史を言へばアギトをこいつの味方にする事なんて簡単なんだよ。

さてと、じゃあまずは顔を「ツチに向けて田をあわせてしま、お話しよ。

「サテトふえいと、キッチリ話ソウジヤナイカ」

「ひつー…………つてオウカ…………後ろ」

フロイトは僕の後ろを描き出した。

僕を騙やうとして……そんなんじゃ通じないよ……つてアギトまで

。

ちよつと待つて……この感じ……嘘、こんなテンプレ要らなこと。
誰かに上げるからさあ……貰つてよーーー

僕は後ろを振り向いた、そこそこ見たのは熊だった。

「グルルル」

間違いなく熊ですねハイ…………。

何でこんなテンプレが……はつきり言ひやあ要らぬいですこん
な物。

熊はそのまま爪を振り下ろして……右腕から鮮血が飛び散る。

「……今日の晩御飯は決定だね

まあ僕が刀を使って切り落としただけなんだけどね。
この程度ならバリアジャケットをまとつ必要が無いし。

「フュイト、目え瞑つて

流石にこの光景は見せるわけにはいかない……管理局の人間でも
フェイトは女の子。

この光景はきつ過ぎる。

「グルルルアアアアアアア」

「はい、これで終了ね」

そのまま首に刀を振り払う。熊は頭部がズレ落ちそこから血を噴出
す、熊の体が倒れ血だまりを作る。僅かに痙攣していたもののすぐ
に動かなくなつた。

僕はその熊をデバイスの中にしまつ、このデバイスは他のデバイス
と違つて色々な物質を収納し保存する事ができる。化学実験の為だ
けに作られた貴重な物だ、と言つても他の性能は普通のストレージ
に比べれば僅かに劣る。

「もう目開けて良いよ

「…………殺したの？」

フロイトが辺りを覆う血の臭いに顔を顰めながらそう呟く。

「うそ」

「…………よく血の臭いが平氣だよね」

「慣れてこらね、主に自分の血で」

「…………」めん

「 むつ良こよ、何か熊に出会いて興奮して逆に頭が冷えたか？」

とこうよつじうでも良くなつた。
めんべくせてもなつたしこんな事で怒るのが馬鹿馬鹿しくなつただ
けだ。

「…………はあ…………何時になつたら琵琶湖に…………」

今の時間帯なら着いている筈だつたのに…………。

「…………ねえ、そのアバイス……光つてねえか？」

「え？」

アギトに言われて見れば少しだけだけど光つてゐる。

「…………これつて、この前観測したロストロギア反応だ……かなり

微弱だけど

フェイントがそう言つて、やっぱりロストロギアみたいな物だったか。

「でもこれって魔力じゃない、魔力よりも強い力だ」

フェイントは刀を見て考え

「これ何処で見つけたの？」

そう言つた、まあ僕も知つてゐし……。

「海で落ちてた、そしてそれに触つたら……いきなり爆発して……
その後にデバイスと融合した」

「……」

フェイントは口を押さえる。

「……もしかして」

フェイントが唐突に呟き、この刀を握る。

「ねえ、一回魔力を使ってみて！」

「う、うん」

そう言われて魔力を使ってみる、その瞬間刀は光り輝く。
その数秒後に一キロ位離れた場所に光の柱が立つ。

「あ、あそこにロストロギア反応が！！」

フュイトがそう叫ぶ。

「ちよっと待つて、と書つ事はこれと同じ……」

ロストロギアがある。

そつ思つたら吉田。

光の柱を田掛けて魔法を使い空を飛ぶ、何で使わなかつたかって？
あまり使いたくないんだよ、これ使つたら管理局が来そุดからね
……。

そして到着し地面に足をつける。

刀はまだ光り輝いている、だけど光の柱は無くなっていた。

「まあ探す前に……」

フュイトと僕のお腹から音が鳴る。

「腹ハラじらえだね」

「そう言つと僕は『バイスから熊を取り出す。

「フュイトは薪となるような物を集めて来て、アギトは鍋とかに水入れて暖めておいて」

「そう言つて一人をどこかにやる。

その後僕は熊の皮を剥ぎ、肉を切り骨を取り出す。内臓などを抉り

取り肉だけを取り出す。

あたり一面は血に濡れていた。

「まあこれで良いでしょ」

そして肉を水洗いしアギトの所に持っていく。

「お、もう終つたのか」

「アギトはまだ?」

「ああ、まだ薪が無いからな」

「じゃあ僕は潜つてくるが」

「またか……まあ良いや」

アギトから許可を貰い湖に飛び込む、もうひとバリアジャケットを着てだ。

「（結構魚がいるなあ）」

魚を取り出した鉢で突く。

そしてそのまま一匹だけ持ち帰る。

「ただいま」

「早かつたじゃねえか」

「……湖つて冷たいね」

海とは比べ物にもならないほど冷たかった……それこそ凍えるかと思つくらい。

今の季節は秋、うん……寒い。

「薪持つて來たよ」

お、ちよつと良いことこの間にフェイトが帰つてきた。
フェイトが持つて來た薪で温まろう、うん……そうしよう。

熊鍋 + 真鯉を平らげた僕たち三人。

「よし、じゃあ探そう」

当初の目的に戻つて遺跡を探す、本当にあればだけど……。
そのまま僕とフェイトはバリアジャケットを纏い、僕はアギトヒゾンする。

「何処にあるのかな……」

あたりを見回しながら石を退けたりする。

「やつだ……」

フェイトがデバイスを構えて結界を張る。

「何してんだよ！－－管理局にまれるって！－－」

「まあそがもしれないけど……でも分かったよ」

フェイトはバルディッシュのある場所に向ける、セイヒョウがおいてあつた。

「あれ魔力を遮断して、でもなんで管理外世界で……」

「まあ昔は在ったんじゃないの？魔法がわ」

フェイトの疑問にそう言ひ岩を押す、魔力が効かないとなるとあの力で破壊するか純粹な力で……。

「……重いけど退かせない事はない」

そのまま押し人が入れるぐらいの隙間を作る。

「フェイトー、中に入るぞ」

「あ、うん－－」

そう言つて中に入る、その場所は階段だつた。その階段を下る、そして刀が強く光り輝く。

「やつぱつ、近づくと共鳴するのかな」

そして階段を下り終えると一つの空間があつた。

その空間には台座があり、壁には一番最初の遺跡と全く同じ物が書かれていた。

違つところがあるとすれば光り輝く綺麗な勾玉があると言つ事だ。

「何……これ」

そう言つてその勾玉に触る、この前の爆発が起きない様に魔力でローディングしてから触った。

勾玉はデバイスの中にそのまま吸い込まれバリアジャケットに装着される。

場所は胸の中心だ。

そして気付いた。

「これ、三種の神器だ」

「三種の神器？」

「詳しい事は分からぬけど神様に渡された物だつたはず、剣・鏡・勾玉の三つで……」

「じゃあ何？この刀つて本物の天叢雲剣？確かに水没説もあつたから……。

「ちよつと待つて、残りの遺跡には……鏡だよね……」

「じゃあ富士山は一体何なんだ？」

「…………」に居てもどりつけない。………… 一旦戻りつ

「………… そうだね」

ただでさえ魔力を消費しやすいんだ、それにここで魔力を使った攻撃は無効になる。

僕達はこのまま遺跡を後にし、上を目指した。

「………… 戻ろう、オウカ…………」

前に居るフュイトがそう言つ。

「大輝が居た」

その瞬間下を目指し元の場所に戻る。そして壁に向かいレアスキルを発動、体中の苦痛に耐えながらも壁を破壊しフュイトを抱きかかえ走る。

「何で私を抱きかかえるの?!」

「だつてフュイトは體に嵌る、絶対」

そう言つとフュイトが頑垂れた。

「フェイエちゃんー待つてーーー！」
やつ語ったけどフェイエちゃんはそのまま戻っていく。

「待つてってばーーー！」

そう言いレイジングハートを向ける。
少しだけ……痛いの覚悟してねッ！！

「ディバイーン……バスターーーー！」

それはそのまま咄に当たって……消えた……。

つてええーーー？

「何で消えちやつたのーー？」

「なのはじけーーー俺が壊すーー！」

「大輝君ーー！」

大輝君ならあれを壊せる、私達もそう信じていたの。

「偽・螺旋剣……」

大輝君から放たれた剣はそのまま岩に辺り衝撃を生んで消えた……。

「な、何でだ……？」

そんな……大輝君でも壊せないなんて……。

「……なのはちゃん、私達がフュイトちゃんを説得するで。私達があそこに入つてなのはちゃんと大輝君は外で見張つて」

はやてちやんたちがそう言つてあの岩の隙間に入つていく……。

「なのは……俺達は待つよ！」

大輝君が肩に手を乗せてそつ言つ。

うん、そうだよね……はやてちやんたちを信じよ。

「ゲホゲホッ……やつぱり痛いモンは痛い……」

必死で痛みを我慢して進み遺跡の外に出る、後ろには誰も居ない。このじやあ魔法を使えないから自分の能力だけで進まないといけない……。

「でも出口は見えたよ……」

「ああ、全く……風が来る方向であつてたな、寒かつたけど」
よし、このまま外に出て逃げよう。

そして外に出た。

「よし、今のうちに

「逃がさねえぜ」

「ツーーー？」

やば、転移してきたな……。

相手は高町なのはに……神崎大輝。

「さあ、フヒイトを開放しやがれ。このクズ野郎」

論破つて考える相手に聞くものであつて考えない人には聞かなくない?ぶつちや

少し難産でした。

おかしい所があつたら報告して貰うださい、修正しますので。

論破つて考へる相手に聞くものであつて考へない人には聞かぬない?ぶつちや

「覚悟しやがれ、このクソ野郎」

目の前に居るのはあの神崎大輝、間違いなく俺を殺す。もしくは再起不能にするつもりだろう。

全く、嫌な奴だ……こりこりう奴にはあんまり関わりたくないんだけどね。

「てめえ……オウカをクソ野郎だつて……ふざけんな……」

アギトがユニゾンを解除してアイツに反論する。

アギトを見たアイツの顔が変わり優しく笑っている。だが目が冷徹で酷く濁っている。

「君は……無理やり従つてるんだね」

優しく言う、だけどアギトには侮辱でしかない。

アギトは幼い子供のようだけど実際は頑固だ、自分の大切な物を踏みにじつたりすると怒る。

僕はそんなことはしてない、懲々怒らせたくも無いし。

「あんな奴に従わなくていいんだよ」

「もう良い、その口開けるんじゃねえクソ野郎」

アギトが大輝に対してそう言つ、大輝は驚いていたがすぐに戻る。

「私のマイロードオウカはな……意地悪だし馬鹿だけどなあ……そ
んなに酷い奴じやねえんだよ……てめえのよつな人を人として見な
いよつな奴と違つてな……」

「アギト……」

アギトの言葉が嬉しい。

僕には勿体無いほどの相棒だ。

「オウカ、私はお前のように管理局員が全て悪い訳じゃないのも知
つてるけど怖かつた、でもフェイトは優しかつた、大好きになつた。
けどアイツは違う、あの研究員に比べたら失礼だけどよ……それ
でも同じクズには変わりない」

「……」

「だからさ、今は敵わなくとも……いつか絶対に倒そつ。」

「ああ」

だけどアギトだつて分かつてゐ、今の僕達ではあの神崎大輝には敵
わない。

精々一泡吹かす程度しかない。

だから、今ここでは逃げる。

ここで逃げられれば……いつか必ず闘つて勝つ機会を得られる。

「フロイトちやん……」

「……なのは」

隣ではフェイトと高町なのはが見つめあつてゐる、言葉だけ聞けば一部の人間が喜びそうなシチュエーションだが決してそんな場面では無い。近い物なら泥沼の三角関係のよつた感じだ。

フェイトからは申し訳ないよつに感じるオーラを、高町なのはからは……何て言うのだらう。

一番近いのは物語の最後の敵に体力を死ぬ寸前まで削られるような感じだ、笑いたくても笑えないよ。

「フェイトちゃん、なんで……」

「…………理由は言えない、それに話しても信じてもうれない」

そう言つてフェイトは高町なのはにそう言つ。

高町なのは達とフェイトで違う物……それはニコポに抵抗できるかどうかだ。

だからこそ、ちゃんと話しても理解したくないと言つ気持ちがある為転生者のそんなことはしない等と言つ言葉に騙される。

「フェイト……大丈夫だ、ちゃんと信じる……俺達は仲間だらう~」

大輝がフェイトに笑いかける、何故かそれがおぞましく……拒絶反応が出でるなど汚い笑いのよつに見えた。

「…………私、知ってるんだよ…………私がジュエルシードを奪取する為に地球に来たとき…………路地裏で」

「フェイト、お前は疲れてるんだ…………それにそんな奴と一緒に居るから……」

話を無理やり逸らした、なのはも少し様子が変だつて気付いている。そりゃあ気付くよね、あんなにまで顔が歪んでたんだから……。

「……フェイ特を洗脳した罪は重いぞ」

「何でそつなるのかな？」

まあそりだよね、一般的にはそり考えるよね。今まで仲が良かつた友人がこんな反応をしたら……おかしいとは感じるよね……。

でも洗脳は無理がある、じょうと思えば僕でも出来るけど時間が無い。

「悪いけど僕はフェイ特を洗脳したわけじゃ無い、彼女が自分の意思で僕と行動を共にする事を選んだだけだ」

「それに僕はフェイ特の許可無く戦っちゃいけないからね、戦闘は出來ないけど」

「…………てめえ」

明らかにドスのある声を聞け。

隣の高町なのはも怯えてるぞおこ。

「で、でもロストロギアを！」

「それに僕は管理局預かりの扱いだ、だからこそロストロギアをフェイ特と一緒に回収してるんだよ。それに今の僕は時空管理局に保

護して貰つて いる以上 時空管理局員と一 緒に 行動した方 が 良い し ね

「 な り 何 で フ ェ イ ト と 行 動 す る ん だ ！ ！」

「 そ れ は 愚 問 、 僕 が フ ェ イ ト に 頼 ん だ し フ ェ イ ト が そ れ に 承 し た 。 そ れ に フ ェ イ ト に 頼 れ ご と し た し …… 」

「 ふ ざ け ん な ！ ど う せ お 前 が 洗 脳 で も し た ん だ ら う ！ ？ フ ェ イ ト は プ ロ ジ ェ ク ツ F · A · T · E で 生 ま れ た ん だ か ら な 、 ど う せ そ れ が 目 的 な ん だ ろ ！ ！ ？ あ あ ！ ！ ？ 」

逆 ギ レ さ れ た よ 。

な ん か も う メ ン ド ク サ イ ！ ！ ！ 話 し た く な い 。

「 悪 い け ど 僕 も そ の プ ロ ジ ェ ク ツ で 作 ら れ た 産 物 だ か り 」

「 そ つ き か ら オ ウ カ を 馬 鹿 に し や が つ て ！ ！ ！ ？ 管 理 局 様 か ！ ！ ？ 」

な ん か ア ギ ト ま で 参 加 し て き た 、 で も は つ き つ 言 つ て し ま え ば 論 破 な ん か メ ン ド ク サ イ 。

そ し て 何 か ア イ ツ の 顔 が 歪 ん だ 笑 み を 浮 か べ た 、 ど う せ 論 破 す る つ も り な ん だ ろ う 。

「 な ら な ん で お 前 は 本 局 で 保 護 さ れ な い ん だ ！ 」

「 メ ン ド ク サ イ し 管 理 局 嫌 い だ し 調 べ る と か 言 つ て デ ー タ 取 ら れ る し 管 理 局 嫌 い だ し 管 理 局 に 入 れ ら れ る し 管 理 局 が 大 嫌 い だ し 、 う ん 。 管 理 局 が 嫌 い だ か ら 信 用 で キ る フ ェ イ ト に 頼 ん だ 、 分 か つ た ？ 」

はっきりと管理局が嫌い、だけどフォイトは信用できる。単純な理由を言つたけど笑うむしろあざ笑つ。

「そんな理由で「まかしてるけど、てめえはフォイトが好きなんだろ?」

「やうだよ」

僕が言つた言葉に時間が止まる。

「まあ僕が好意的に思う人は全員好きになるのかな?嫌いは悪寒がするし」

僕の中では好きは吐き気がしないし少し明るくなる、嫌いは悪寒がするで判断してくる。それ以外は普通になるのか?

「う、うん。そうだよね……」

フォイトは何がつかりしてんだか、無自覚好意つて言つの?まあ個人的にはそれが勘違いでも本当でもどちらでも構わない、それに単純に好きって言つだけで顔を紅くして……。

そんなんじゃあ愛してるとか言われたらとんでもない事になるぞ。

「な、う……うう」

あ、どうやら驚いているらしい。まあ自分に素直に言つてみたからね、単純に単調に素直に言つ。それが一番大事。と、言つよりはメンドクサイだけなんだけど……。

「僕を論破したかったの？でも残念だね、僕はそういうのに興味がないからさ」

「ぶつちやけ論破なんてどうでも良い、悪い行動でも自分に素直で行動する。後悔が無いわけじゃないけどね。」

「それと一つ言わせて貰う、私はお前が嫌いだ。私の肩を殺傷設定で貰いた時の事は忘れないぞ」

「なー！嘘言つてんじゃねえー！」

「嘘じやない！私は知ってるーー！」

フェイトが叫ぶ、その目はしっかりと大輝を見据えている。

「え……フェイトちゃん……それどう言つ

「ウオオオオオオーーー！」

高町なのはが言い終わる前に神崎大輝は白黒の双剣を投影し、僕に斬りかかって来た。

僕は刀を抜きそれを防ぐ。

「いい加減にしろー！フェイトを操つて……ーー！」

「てめえがいい加減にしろよー！いい加減話を聞けこの馬鹿ーー！」

ギリギリ……と金属の音が響く。

「あーもうーー。フロイト許可をーー。」

「あ、うふーー。」

「ねーー。」

そのままで弾を飛ばす。

「フロイトがやんーー。ビーハーの事なのーー。」

「「あんなのは…………でも、話だけじゃあ…………何せ近いわいなーー。」

フロイトもなのはに向かってやつぱり。

何故か小さこ高町なのはと小さこフロイトが脳裏をよぎる。

「ああああああああーー。」

「へやーー。」

「ねーー。」

「ねーー。」

また甲高い金属音が響く。
くそ、邪魔だ……。

左手の黒い双剣をかわす。

「……当たれよクズ」

「本当に転生者相手には容赦ないな」

「ハツ、たりめえだる。悪いけどな、フェイドを元に戻しててめえは監獄にぶち込まなきゃいけないんでな」

「そりやあ忙しい事で……つと……」

「うおー!?」

右手の白い剣をはじき一気に接近し切り裂く、無論非殺傷設定だから傷は付かない。
だけど痛みはある。

「がつ！…?クソ……てめえ！」

大輝は剣を振るう、けど戦つてよく分かつた。
こいつに剣の才能が殆ど無い、だから剣道を習つてゐる初心者程度の腕前なんだ。

「なら……倒せる……」

そつとつて更に一閃、そのまま切り裂く。

「あぐあ！…?クソ……ふざけんなあああああー…!」

そう叫んで剣を破棄し、大輝は僕から離れた。

「てめえ……これは止められるか?」

「そう言つて黒い』に黒い鎌を投影した。

「赤原獵犬！」

そう言ってから放たれた鎌はそのまま僕に接近する。

「はい！」

そして僕はそれをはじく。

「今の矢に一
体何が……」

「お、そこまでいいのか？」

「なに？」

つて何時の間にか弾いた鎌がまた僕に接近していた。
それをまた弾き落す。

「これってまさか

「その通りだ、そのままお前に当たるまでずっと狙い続ける。安心しろ、非殺傷設定だ」

そんな矢使うな！！

……あ、でもあれなら防げるかも。

「フェイト！！！あの中に入るぞーーー！」

そつまつてフロイトの方を見る、そこには高町なのはと戦っているフロイトが居た。

「あ、う……分かった！」

そつまつて戦いを止めてコッチに来るフロイト。

「待つてフロイトちやん……！」

高町なのはがじゅうに接近していく、でもその前にあの矢を無効化しないと……。

「無駄だぜ、フルンディングはお前を追い続ける」

そつかもしれないけど……やつてみなきや分からない……！

よし、遺跡の中に入った。やつぱり魔力がいきなり使えなくなる。そして矢も入る、赤い光が消失し矢だけになる。

「うおらー！」

そしてそれを地面に叩き落す。

矢は地面に当たりそのまま消え去る。

「マジかよーー！マグレじゃねえのかよーー！」

どうやら一回試したよつだ……。

でも今がチャンス。

「走つて逃げるよーー！」

「貴様等は」の私の眼に嵌つたのだ……」（前書き）

早めに書き終わった…………。

前回の大輝の言動が悪かつたので今回は大輝の心情も加えました。

「貴様等はこの私の眼に嵌つたのだ……」

「ボゴー！」

地面から手が一本だけ生えてきた。

その後刀が出てきてそのまま切り裂きオウカとフェイドが出てきた。

「…………ゲホツ…………」

「大丈夫、オウカ…………」

オウカは口から血を吐き出し、フェイドはそれを心配する。

「無理もねえよ…………炎じゃないやつ使ったんだから」

アギトがオウカに回復魔法を使う、ちなみに苦手だった回復魔法もオウカの負傷回数が多い為段々上達してきている。

「炎だけじゃないんだね、使えるの」

「…………他は物凄く力を……ゴホツ…………使うし体の負担も大きい…………」

「見れば分かるよ」

オウカはダバダバと血を吐き出し続けている。
だがそれも十秒程度で治まる。

「ゲホッ……最近本当に血が足りない」

「そりやあ最近ずっと血を吐きつ放しだからな」

「……輸血でもしようかな?」

オウカは本当に真剣に考えていた。

「で、でも今は逃げられた事を考えよ!」

「やつだね、そういうことを漫画みたいに画つと

オウカは一瞬溜めて

「貴様等はこの私の體に嵌つたのだ!一だつたつけ?」

「お願いだからそれは言わないでね、何かが起つたから」

「……はあ

ああ、さつきの俺は間違いなく最低系オリ主だつたな……。
それにフェイトに見られていたなんて……そして明らかに拳動不審
とか……「うん、これじゃあバarelよな。

「……大丈夫、大輝君……」

「……なのはか」

不安そうに話しかけてくる、でもその目には疑惑がある。
そりやそうだよな……。

「……なのは、俺つて最低だな……」

「大輝君……」

ああ、俺は最低だ……。
フェイトに見られた事だつて話す機会はあつたんだ、こうなれば……
フェイト達にもう一度会つて本当のことを言わなくてはならな
い。

「アソシだつて辛いのに……本当に自分勝手だな……俺つて

転生者の能力が分からぬいけどアンチ管理局と云つよりは純粹な被

害で嫌つてゐるんだわ」。

「……分かり合へるよ、話し合へば必ず」

「なのは……」

なのはがそう言つてくれたのが嬉しかつた、そしてなのはの笑顔に惹かれた。

何故かハーレムと言つ言葉に背徳感を感じる、ビzugしてだ？

でも本当に氣になる、前回もやつだが……アイツのレアスキルつて一体何なんだ？

そもそもアイツは本当に……

いや、ありえないだろ？……。

「……なのは、ありがとな……」

「うだな……一人くらい……転生者が欲しかつたんだ。
st s 編はスカリエッティ側に転生者が居る筈だ……、それに対抗する為にも……。

「（そうだよね、大輝君は優しいから……何かが合つてもちゃんと教えてくれるよね）」

「うして、一人の転生者は自分の間違いを認め反省した。彼は正しくなつた。

「へえ、中々良い素材が居るね」

そう呴かれた声の主は誰にも聞かれること無く、消えた。

「うじうじ悩んでたって仕方が無い！！フェイドたちを探すぞ！！」

「うん！」

だが彼は近い将来、自分の身に危険が及ぶ事に気付いていなかつた。

力ポン

「はふう……良い湯だな」

僕達は必死に隣町に逃げて今は旅館に泊まっている、温泉付きの結構金がかかる旅館だ。

「いやー、温泉はリリンが生み出した最高の文化だね」

本当に体が芯から温まる、今の言葉は確かにヴァンゲリオンの台詞だつたね。

人気作品だったから覚えてこむ、前世の自分もよく……見てたつけ？

まあいいか……今は温泉を楽しもひ。

「それにしても」

僕は自分の長すぎる髪を見る。

「本当に髪が長いな……」

髪長いつて不便だよね、洗うのに時間がかかるしそうだ、明日切らう。

その頃女湯では

「はふう…………良じ湯だな～」

「確かに良い湯だね」

「むう…………羨ましきぞー・フロイトの胸ーーー」

「や、そつかな？アギトも可憐にから」

「私の胸は成長しねーよーー少し寄越せーーー。」

「え、ちよつとあーーー。」

そして男湯に戻る。

あ、今の男湯の状況は……

「ウオオオオオオオオ！－－何でこの壁を乗り越えられないんだ！－－この壁の向こうに理想郷『アガルタ、もしくはアヴァロン』があるのに！－！」

「そりだー何でー」の壁があるんだーー」の向いには嫁《幻想》が居るのにーー！」

「僕達はなんで海鳴に住めなかつたんだ！！！」

明らかに馬鹿が居る、つかやつぱり海鳴に転生できた転生者つて少ないんだね。

「はあ

またまた女湯

「さて、やるやく上が」

『ち、縮む！あそこが縮む！』

「……一体何が」

「間違ひなくオウカだな」

「何か言った？」

一
いや
別に

「上かNIIよ」

九三

またまた男湯

風呂で落かしたいけど行けねえ！！足が動かせない！！

絶む！ みソノテハシケがお稚遊はなる！！

……あそこで風呂の水が凍り付いて移動が出来ない馬鹿達……、風呂に入つてない奴は大丈夫だつたようだけど…………。
だから氷で出来た禪を作つた、まああくまで覗こうとした馬鹿だけ、純粹にお風呂に入つてる人は例外。

「……本當に輸血も考へないと」

お風呂に直接血を吐いた僕はそのままお風呂からあがりかけ湯を体にかける。

「…………まあ凍傷にはならないだろ？ね、お風呂のお湯が流れてる
わけだし……熱いし」

そう言つて僕は体をバスタオルで拭く。

۷۷

「……で、これからを如何するかだね」

フェイトは地図を開き僕達と一緒にこれから如何するかを考える事にした。

まあ当然だよね、ここから北海道までは本当に遠い。自転車だけの逃走なら一ヶ月近くかかるだろう。

真直ぐ進んだら行き先が北海道だつてばれる。

「……それだと結構時間がかかるよね」

「まあそれは割り切るよ、それよりも」

僕はテレビにリモコンを向けてスイッチを押す。

で
で
で
で
で
ん

今は劇場版迷探偵ボナンでも見ようよ」

迷探偵ホナンとは名探偵なごめ迷探偵の珍解説をするお話をある

俺は

九
三
三

「そんのは後にして。今は行き方についてだよ、でも本当に良いの? ジグザグに進んでいく事にするつて

ああ、成る程。

「ああ、それね。大した意味は無いよ。またまにシケサク、普通に真直ぐという感じ」

「…………まあそれで良いなら良いんだけど」

「じゃあ早くリモコン返して、ボナン見たいから」

「いや、私ベンタミン見たいから」

ベンタミンとは推理物の作品、女性に大人気。

「…………じゃんけん…………」

「はい、ベンタミン」

「何で……？」

結局ベンタミンを見る羽田になつたよチクショ――――。

とある世界にて

「ただいまテス 頭領」

「…………」

「ああ、丁度良い駒を見つけたネ」

「…………分かつた、そいつのデバイスにこれを入れろ」

「おお！…これが頭領がある人間から奪い取った獣のデータかネ！」

「

「…………」

「了解だネ」

「貴様等は」の私の眼に嵌つたのだ……」（後書き）

次回から暫く管理局サイドは書きません、と書いつゝは事件を……

⋮

変死体ってどんな死体なんだろ？ まあ変死って言つから常識では考えられない

なんか今回でグロイのが入りました。
でも大丈夫だよね？ 主人公はほとんど吐血しているから……慣れて
るよね？

と言つより連続投稿です！！

できればもっと明るい話を書きたいです……。

変死体つてどんな死体なんだろ、まあ変死つて言つかり常識では考えられな

現在、僕達は長野県に留ます。そして今は名物巡りです。

「こやー、ほのじつて以外に美味しかったな。あんな見た目だけ
ど

「よくアレを食べたよな…………あたし達は無理だつたけど

「うそ、流石にあれはね

フロイトとアギトが顔を引きつらせながら買った蜂蜜を舐めてる。
まあほのじつには見た目がアレだから女の子にはきつこか…………。

「じゃあ次は蕎麦にしよう……」

この近くに有名な蕎麦屋さんがあるからね、そこで山菜蕎麦と天ぷら蕎麦を食べたい。

「流石に食べすぐじやない?」

「平氣平氣……」

「うう…………体重が……」

あれ?フロイトもしかして体重増えたの?と言つたら殺されかねな

いので言わない。

まあ美味しいからじゃなくて他に理由があるからね、僕の場合。

「別にフェイトは食わなくて良いんだぞ、オウカは単純に血が足りないから食つてるだけなんだし」

「え、そうなの？」

流石は僕の長年の相棒、パートナー そう言つとこよく分かつてるねえ。

「あ、分かつた？」

「そりやああれから一週間経つてるとほ言えよお、あのレアスキルの連発は体に堪えるだろ。しかも何回か火以外も使つてるんだからさ」

「まあそりなんだよね、ぶっちゃけ血も足りないしカロリーも足りない」

そう、僕の体は生まれる前から改造されてるからね。分かるのだけだけど筋肉纖維の数、だつてメツチャ多いし生産される血の量も多い、まあそれが追いつかないほど血を消費してるけど……。

まあ僕は普通の人間の1・5倍の栄養とカロリーが必要だからね、それに最近m y自転車、プロミニネンス号をメツチャこいでるからかなり体力使う。

本当にカロリー + 鉄分が欲しい、何故か最近鉄を見ると何故か涎が出来るからね……。

「まだからあ…………って……」

いきなり鼻に来る嫌な臭い。

「どうしたんだよオウカ？」

「血の臭いがする……結構濃い」

「お前の嗅覚って一体どうなつてんだよ」

あ、今叫ひ声が聞こえた。

.....
行ってくるね

フリーランスの管理職だからね、やつはうじうじの仕事逃がしないんだから。

つたら間違いなく厄介事だと頭の中に浮かぶ。

てお僕も気がなる。家の中の臭いは湯石は分からぬけれど遡くて濃い血の臭いがしたんだ。血の量で例えるなら四肢と首を切り取られた時に出る血の量、もしくは体を縦から真つ二つにされ出でてくる血の量と同様くらいである。

こんな真昼間でた

「あ、僕も行くよ！ ちょっと不可解だし」

そう言って僕もフロイトの後を追う、もちろんアギトの手を掴み一緒にだ。

「ちよつ！速過ぎだつてー！」

いや、フェイトもかなり早い。

つて人が集まつてゐる場所があつた、そこにフェイトが入つてく。

「待つてつて……フェイト……」

人ごみを搔き分けフェイトを探す、やつぱりテンプレ的に見える位置に居た。

「よつやく追い……ついた」

フェイトは口を押さえて青い顔をしていた。

……そりやあするだらうね……こんな変に体が捩れている死体を見たら……。

「フェイト……」

これ以上見せたら吐きかねない為フェイトを無理やり自分の胸に押し付ける。

他人が見れば抱きしめている行為かもしけないけど……今この場では仕方が無い。

『またかよ、今月で何人目だ?』

『十三人目だぜ、それに狙われてるのはあの不良グループだし』

『ああ、こいつ等には色々と酷い目に合はれて来たけどよ。またか殺しちまう奴が居るなんてな』

周りの人の話し声がよく聞こえる、これまた殺されてこるのは不良グルーフらしい。

恨みを買つのは当たり前かもしれないけど殺す奴が居るとはね。

「……フュイト、行くよ」

フュイトを連れて行く、今はここの畠あたりでたまらない。
それにお腹も減つてゐるし蕎麦屋に行かなーと。

「……よく食べれるね」

フュイトは今も顔が青い、と皿つよつたつをトレイでゲーゲー吐いてたからね。

「……被害者には悪いかもしないけど、……されは罰じゃないのかなって思った、殺された人たち全員どうじよつもないほどのクズだったらしいし」

「……」

「この事件は殺された方が悪い、と皿つ言葉しか思い浮かばない

いぐりなんでも同情なんかする気分じゃない、むしろ死んで当たり前……てこうわけじやあ無いけど……。

「……それにこの事件、100%警察じやあ犯人を捕まえられない

「どうしてだ？」

アギトが尋ねてくる、まあ殆ど感と前世の知識頼りなんだけど。

「この事件は魔法、もしくはレアスキルが起こした物だよ。つか僕の予想じゃあレアスキルになるけど」

「…………それ如何言つ事？」

「まあ詳しい事は分からぬけど空間を捻じ曲げるレアスキルがあるんだよ」

「それって一体？」

「歪曲の魔眼と呼ばれるスキル、田に[与]した場所に回転軸を作り曲げる事が出来る能力」

「…………なに、そのふざけた能力は」

あ、フュイトが驚いている。

「まあ確かに恐ろしいけど対処が出来ないわけじゃない、それ以上に恐ろしいレアスキルだってあるから」

その後に「まあ透視能力まで付いたら最悪だけどね」と付け加えた。まあこの事件に関しては透視能力も持っている事になる、それに今回のは転生者が起こした事件だろう。

でも分からぬ、この事件を何故起こしているのかが…………。

「な、なあ……あんた等……」

そつ思つていたら知らないおじさんと話しかけられた。

おじさんと言つても体は健康そつだしちゃんと鍛えられている、髪が似合つ顔をしている薄紫色の髪をしている。ぶつちやけ白髪に近い。

「今、魔法つて言わなかつたか？」

「ええ、言いましたが？」

「オウカ！？」

フェイトは驚いているけど僕には分かる。

あの事件現場でかいだ匂いの一部がこのおじさんにつこてるからだ。

「「うちに来てくれないか？」」の事件の事で話がしたい

「暫く泊めてくれるのであれば」

「これはまた……厄介事のようだね、まあ違つと言つ事は今回は僕も乗り気と言つ事だ。

まあフェイトはすっかりやる気になつたようだから僕が手伝つのも強制なんだけど……。

「これでも管理局預かりだからね、時空管理局のフェイトの補佐としてがんばりますか。

路地裏で一人のフードを被つた少女と学ランを着た男が居た。男の右腕は完全に、そして不自然に捩れていた。

汚い悲鳴だな

フードを被つた人間の声は高く、まだ完全に成長していない少女の声だ。

据れた膝から血が地面に落ち、男は「バト」を被った少女から離れようとする。だが少女がそれを許さないと言わんばかりに一步足を踏み込む。

「ひい！！だ、誰か助けてくれ！！」

「無駄だよ、ここには防音の結界を張っている。貴方がいくら助けを呼んでも誰も来ません、もつとも」

少女はさらに足を一步踏み込む。

「助けを呼んでる相手が貴方だと知つたら誰も助けないとと思うけどね」

その言葉を言った直後に男の左腕は捻じ曲がる。

「曲れ」

次に左の太ももが捩れる、血が大量に流れ出す。

「？」

男はのた打ち回る、だがそれすらも少女は許してはくれない。

一動ぐな「

少女は男の腹部を蹴る、それで男は使えない腕で腹を押さえようと
する。

「…………話しだらう、でもな……お兄ちゃんはもうと話しかつたん
だ……」

ゴキン

男は首をねじ切られ、そのまま命を落した。

「…………はあ…………はあ…………お兄ちゃん…………やつたよ、…………残りは後…………六人だよ」

空を見上げた少女の顔は寂しそうな笑顔だった。

その日の夜のニュースに被害者が14人目になったと報じられた。

「カラハナタマヒナ」注意を-（前書き）

はこにからでらうじりなもちのぬりつけなどにさうなのをもたらか
かいする

上の図を解けば解いて下せ。

ヒントはパソコンです。

……やる人いるかな？

「ラノン少女にて」注意を-

「ではそのソファーに腰をかけて下さい」

目の前の男性に勧められるまま私とオウカとアギトはソファーに腰掛けた。

この家、と言うよりは洋館に招待されてから既に十分。目の前の男性が使用人らしき女性に茶を持って来る様に伝えるとツチを見た。

「…………今起きてる事件は…………私の娘が起こしている事です」

男性の口から出た言葉に驚いていた、オウカは何となく予想はしていました。

「…………どうしてその娘さんがそんな行動を？」

私が男性に聞く、でも男性は顔を下げる黙り込んだ。

「…………それは…………」

「ああ、言いたくないなら言わなくても良いです。取り合えずその名前を教えてください」

「うなると話が続かない、今は大雑把でもいいから情報が欲しい。」

それにそういう情報は後になつて明らかになると思う、推理小説のお約束だ。でも本当に推理になるのかな？私には何故かその犯人とオウカが戦う姿しか思い浮かばないんだけど。

「……名前は木蓮センナと言います」

「木蓮……センナですか……」

男性の言つた名前を呟く。

「あー、すみません。トイレって何処にあるんですか？」

そしてオウカはいきなりそんなことを言つた、空氣を読んでないよ……。

「ああ、トイレは」の部屋を出て真直ぐ行き左に曲がればありますよ

「教えていただきありがとうございます、フロイトへ後よろしくね

オウカは私に後を任せそのままトイレに向かう。

「……そのセンナさんの写真はありますか？」

オウカがトイレに行つてゐる間に話を進めないと、そもそも私は管理局員だ。

オウカを一応保護しているといつてもそんなに時間はかけられない、本当ならすぐに本局に連れて行かないと駄目なんだけど……本局で何かあったのか暫くは自由行動が取れるのが救いだ。

それにこの事件を解決して犯人を本局に送ればオウカの立場も良くなる筈……。

「ええ、ありますよ。と言つても幼い頃の写真しかありませんが」

そつ言つて男性は写真を取り出して私とアギトに見せてくれた。

その写真には田の前の男性と綺麗な女性、一人の男の子にまだ幼い少女が居た。

「……この小さい子が…センナさん」

その少女の顔は優しそうな雰囲気でとても人を殺すような子ではな

くせつだつた。

「ええ、その子です。母親に似て優しい子なんです」

「……でも何で……」

「……白夜が……」

「え、今なんて?」

「いいえ……なんでもありません」

この男性は何かを隠している、でも無理に聞き出そうとはしない……。何でか知らないけど……悲しそうに見えた。

「ただいま~」

あ、ようやくオウカが戻ってきた。
少し遅かつたけど如何したんだろう。

「ねえフェイト、犯人……木蓮センナの事分かつた?」

「うん、幼い頃のだけど写真があつたから」

私がその写真をオウカに見せるとオウカは顔を顰める。

「……この娘ならさつき外で見たよ」

オウカの口から放たれた言葉に私は度肝を抜かれた、それ以上に抜かれてる人も居るけど……。

「オウカってそういうのに関わりやすいよな、確かこういつのてんぶらだつたっけ?」

アギト「めん、今は構つてられない。今はオウカの放つた言葉を処理しないと……。

「そ、それは本当ですか!?!?」

つて私より早く復活した男性がオウカの肩を掴んでいた。

「「つおーーー揺れる揺れるーーー」

「本当に居たんですか!?!?」

「う、うん確かに居たよ……」

「そ、そつか……良かつた」

男性は目に涙を溜めて床に伏せた。

「ねえオウカ、会つたつてどうこいつ事?」

「うん、実はわざわざね」

オウカが口を開き話し出す。

時はオウカが事を終え部屋に戻る、つとした時

「ふう……」

いやあ、いいのトイレつて多かったね、うん。旅館よりもあつたと思う。

だからなのかな?妙に不安であまり集中できなかつたのは……。

「まあいいか、それよりも早く戻らないとね」

フェイトとアギトが待つてゐるかもしれないし、情報が欲しいからね。

「それに結構ラッキーだつたね、お金も使わずにこんな良い所に泊まれたんだから」

まあ厄介な事件に関わるから - なんだけど……。

「にしても夜景も見れるなんて……って」

外で女の子がお腹を押さえて蹲つて、それに後ろから明らかに変な人が女の子に向かってジリジリと近づく。流石に目の前でそんな犯罪行為をさせる訳にはいかないので助けに行くか。それだと断定するには早いかもしれないけど変な人の方は不良だろ？

そう思い窓を開けてそのまま飛び出し、女の子の近くにいる。

「大丈夫？」

取り合えず、そう言つ。

外傷は無い、多分腹痛か病氣とかだと思つ。

「……だれ？」

「通りすがりの」

後ろからバットが振り下ろされる。

その振り下ろされたバットの最も細い部分に足を振り下ろす。無論魔力による強化は施した。

その結果バットは根元から折れた。

「なつ！？」

「正義の味方だね」

そして驚いている不良の顔に直接拳を決める、歯が折れ鼻血も出でいた。

「ぐうお、いてえ」

そう言つと不良は走つて逃げた、何かやられ役の匂いがふんふんしたな。

「あ、あの助けてくれてありがとウイザードさま、……」

「ん? 別に良いよ」

そう言つて少女の顔を見た、薄紫色の髪でピンクの綺麗な目に可愛らしい顔立ち。

顔はまさしく東方の古明地をとつだ。

「それより大丈夫? お腹押せんでいたようだけど……」

「もう大丈夫です、それでは私はこれで……」

「そつ言つてさとり(仮)は去つて行く。

「本当に大丈夫だったのかな? まあいいか」

それよりも戻らないと、フェイトに怒られるかもしれないからね。

「と言つて、まさかあの子がその木蓮センナだつたなんて」

折角会つたのに素顔が分からなかつたから見逃してしまつ事になるなんて……。

……でも焦つちゃ駄目、時間はある。でも何で木蓮センナは不良を

殺してゐるんだわ。

「…………めと、フュイト…………」

オウカが申し訳なさそうに言つ。

「今日はもう遅いから…………明日探そつ

「それならお部屋をいじ用意してます」

つて何時の間に私の後ろに…………。

「オウカ様は私に付いて来て下さい、フュイト様とアギト様はルチアに付いて行つて下さい」

私はアギトと一緒にルチアと呼ばれたメイドに付いて行く。

行動は明日からだ。

男の右腕が捩れていいく、捩れた場所は間接だ。そこから地が噴出し
……捻じ曲がった手の色が青くなつていいく。

「うるさい、黙れ」

男の左足が擦れ悲鳴を上げる。だが誰も助けに来ない。

「まさか私を襲おうとするなんて、あの時は動けなかつたから危なかつた。助けて貰つた事に感謝しなくちやね」

な、なんで……」

だからこそ、前

そのまま男は胴体が捩れてその生命活動を停止する。

「ツ！ ホホホ！」

少女は手で口を押さえ咳き込む、そしてその手を見る。その手には赤い液体が付着していた。

「……もう私は長くない……その前に……殺さないと……」

「あれ? ここ何処?」

フェイト・ト・ハラオウンは白色の床しか無い空間に居た、空も白、床も白と床と空の境界線すら無いほど白だった。

「……私は確か……じゃあこれは……夢?」

フェイトは少しづつ思い出しながらあたりを見回す。だがあるのは白い床と白い空、自分を鏡で写したかのよつとそつくりで青色の髪をした少女だけ。

「ツー! ? 貴女はー! ?」

フェイトがその少女を見て驚愕する、成長してこそのが……あれは間違いなく。

「ひつさしふりー! ! フェイト! 」

少女はフェイトのバルディッシュに似たデバイスをぐるぐると回し
上に放り投げる。

「僕は雷刃の襲撃者……またの名を……レヴィ」

「ゴンッ！－！

雷刃の襲撃者の頭に上に放り投げたバルディッシュに似たデバイス
が頭に直撃して倒れる。

「ギ……すら……しゃー」

「トサ

雷刃の襲撃者、彼女は外見に似ていても中身は僕っ子
のお馬鹿である。

「カラモノ少女」と注意を…（後書き）

僕っ子は正義…！

よくある推理物では大抵被害者が最低なのが多い、「そつじやないと推理物と

後何話で長野県での話し終るんだね」……。

よくある推理物では大抵被害者が最低なのが多い、「やつじやなこと推理物」と

「お早うアギト…」

「わっふー…ってオウカか、如何したんだよ」

「いやー、久々にアギトを抱きしめたくなつたからさあ

本当に昨日はよく寝れたよーしかもカロリーも鉄分も補給できたし、完全回復！だよ。

だからアギトを抱きしめてるんだよ、いやあ髪の毛柔らかいね……流石は女の子。

「そう言えばフェイトは？」

「まだ寝てる……でも起こさない方が良いぞ」

アギトがそう言つて事は……嫌な予感しかしない。でもここで行かなければなんか面白いのが取れないかも知れない。

でも自分の命を賭けたくは無い……どうしたら。

「あ、フェイト」

……僕は自分の命を取りました、って何時ものフェイトと違うね。なんて言つんだろう、髪も少し青色っぽく見える。まあそれは太陽

の光で反射してくるからなんだけビ。

まあ氣のせいであつた事は変わらなかつた、だつて影に入るといつもの綺麗な髪の色だから。

でも何で田の部分に深い影があるんだろウ……。

恐ろしこモビ怖い、田を逸らしたこナビ逸らせられな。何の無言の圧力。

本当にこれフュイド~別の何かじゃないよね。

「……お早ウ……」

「は、はー。お早ウハヤリこます」

挨拶するとそのまま通り過ぎてこへ、まるで幽鬼のようだ。

「い、一体何があつたんだナウね

「……今は生きられた事に感謝しよつ、神様に

「うふ、僕は今この時ほど神様に感謝した事は無いよ

「うん、本当にうだよね。

そう思いながら僕は後ろを振り向いた、そこに居たのはホラー映画顔負けの恐ろしさを持つてゐる寝起きのフュイドが居た。

「あ、あはははははははははははは」

やっぱ、弁解しようとも出来ない。言語能力が退化してしまつたら

しい、何でだらう。

つこをつきまで普通に喋れたのに、今の僕には口から言葉を吐く事すら出来ない。それに何故か頭の中に浮かぶのは幸せな記憶ばっかり。

そしてある答えに行き着いた。

ああ、これが走馬灯か……。

「そうオウカが言つてました姉さん！！」

隣でアギトが土下座して僕に罪を擦り付けていく、普段なら怒るだろうけど今は尊敬しかない。

よくこの状況で嘘が吐けるなあ。

「……」

フェイトは僕に近づく、ミシィと嫌な音が響く。
僕の命もここまでか……。

ユラア……ボス

……あれ？ フェイトがいきなり僕の胸に顔をついた。

「ごめん……少し……眠い……ぐう」

あれ？ 寝ちゃったよ。

もしかして寝不足でああなつたのかな？

「……わりい、オウカ……人質にして」

「いや、気にしないで。アレを見たら……流石にねえ」

うん、今回は誰も悪くない。そういう事にしておこう。

「でもどうよつか……」

そう、フェイトが寝ている以上朝食を取る事が出来ない。

「あー、それの事なんだがなオウカ」

「ん？」

「朝食は8時30からだ

今は6時30分、最近早く行動してたりとそういう生活習慣が付いていたからな。

「じゃあもうちょっと寝ていても良いよ、僕も本読んでるし」

「そうだな」

僕はアギトについて行く、フェイトたちの部屋を知らないからね。ん？フェイトをどう運んだって？お姫様だつ。

「あ、お帰り～」

「…………ただいま」

「こはやつきの白い空間、そして私の前に立るのは間違いないくマテリアルの雷刃の襲撃者だ。

それにこはやの夢の中じゃない、痛みがあった。

「じゃあ改めて…………僕の名前は……！」

雷刃の襲撃者がバルディッシュに似たデバイスを振り回しに放り投げようとする。

「お願いだからそれは止めて普通に名前を言って」

「ちえー、折角かっこいいポーズも考えたのに」

だってそれをしたら間違いなく頭に落ちて氣絶するビジョンが頭をよぎるから。

「まあ僕の名前はレビィ・ザ・スラッシュヤーだよ」

青いマテリアルの子、レビィ・ザ・スラッシュヤーは自分の名前を胸を張つて言つ。

「じゅあレブイって呼ぶね」

「うそことよ」

「リリは何処?」

「う、私が今一番気になつてたとこだ。

「まあ夢だと想つよ、フロイドのね」

「いや、セツキ痛みがあつたんだけど」

「僕は王や星光と違つてセツキの詳しくないからね、そもそも秘密にした方がかつこじやん!」

「やつぱりこの娘私と全然と違う、あの時は戦つてる印象しかないけど……戦わなければ普通の女の子なんだって。

「あれ?何でだらり……体が持ち上げられるような

「あ、もう帰っちゃうんだ。じゃあね、また会おうね~」

「あ、起きた」

ようやくフュイトが起きた、あれから一時間も寝ていたからね。田の影も無くなつて髪も普通に綺麗な金色だし顔も赤く。

「ゲフ！？」

いきなりフュイトに殴られた、原因は僕が膝枕をしていたからだ。僕は鈍感じやない、だからこそ分かる。単純にビックリしたんだろう。

「「めん、フュイト。でもだからって殴らなくとも……」

「「、「ごめんなさい」

さて、フュイトが起きた事だし……ってアギトがまだ寝てた。

「アギトー、起きひー

「……一度寝は最高だな」

アギトがそんな事を言つてるけど気にしない、決して僕が一度寝出来なかつたハつ当たりじゃない。

「じゃあご飯でも食べに行くよ

よつやく朝食が食べれる、お腹が減りまくつたからね。

そして朝食が食べ終わり中庭に来た。

「ねえオウカ、犯人を見つけに行かないの？」

フェイトがそんな事を言ひ、まあ僕とアギトだけならあれを対処するのなんか簡単だ。
でもフェイトは違つからね、そこんところ教えとかないといけない。
じゃないと死ぬ。

「いや、それは明日から。その前にフェイトに戦い方を教える」

「え？ 私これでも一応執務官なんだけど」

「じゃあ戦い方見せて、結界は張らないけど」

そう、ようやく魔法を使えるようになつた。管理局員が別の事件に当たつているからだ。
だから今管理局員はこの世界に居ない、そのお陰で結界も張り放題だ。

「うそ、じゃあ……バルティッシュ、set up

そう言ひて結界を張り、バリアジャケットをまとひ。

「アマノムラクモ、set up」

そして僕もバリアジャケットを纏い……

「ふつー。」

「……つぐーーーー？」

フェイトを切り裂く、だけビフェイトはバルティッシュで防御する。

だけビバルティッシュが今の一撃で折れそうになつてゐる。

「こきなり何を」

「はい、死んだ」

そう言つて刀を首に突きつける。

「言つておくれどお前今で十回は死んでたよ」

相手はあの歪曲の魔眼持ちなんだ、見ただけでアウトだ。

「バリアジャケットを着たらすぐにダッシュ、そしてヒット＆ランだよ。そうじやないと本当に死ぬよ」

今回は必殺技なんか要らない、必要なのは高い機動能力に確実に攻撃を当てると言う事。高町なのはみたいに止まって砲撃を撃つタイプとは違つ。

つか高町なのはなら死ぬ、これ絶対。

「まあ覚悟しなよ、この戦い方覚えるまでは戦わせない。死なせたくないからね」

フュイトが震えているけど気にしない、まあがんばつてね。

「へふう~

いやあ、良じお風呂だつたね。

温泉とは違つた味わいがあつたよ、で……フュイトさあ。何でソフ
ア~で倒れてるの?

もしかして修行のせい?あの程度で?嘘でしょ?

「……ねえフュイト、本当にその程度でくたばつたとか……嘘でし
よ?」

「……体中が痛い……」

「アギト、治療してやつて

ああ、何だその程度か。よし、こんな時の為に居る治療用アイテム!

「……オウカさあ……最近あたしの事を回復アイテムとか思つてね
えか?」

「思つてないよ

そう、思つてない。治療用アイテムとは思つてゐるけど。

「やうかよ、まあフェイトにはオウカの特訓はきついと思うぜ。フェイトは本来はミッド式の魔導師だからな、肉体的な技を使うベル力の騎士であるオウカが相手じゃあしょうがないと思ひやせ」

「まあそつなんだよね……そもそもミッド式なら遠距離技にすれば良いのに」

実際ベルカの騎士には勝てない。

「やうだ、フェイトをベルカの騎士にすれば……」

「まあ相性とかもあるけどフェイトには合ひそうだな、でもベルカ式を組み込んだデバイスが無い」

まあその通りなんだよね、あるのは僕のデバイスにフェイトのデバイスに奪つたデバイス……。

「あ、一つあつた。まあそれにベルカが組み込まれてるか分からないけどね」

僕はそう言って奪つたデバイスの中にある魔法を確認する。

「色々あるね、ベルカの魔法に……何だこれ？まあ・えれべあ？」

何か嫌な感じがするなあ、少なくともこれはフェイトに使わせない方が良い。そんな予感がした。

でも一応フェイトの予備デバイスにしておこう、僕のは外れなから必要ないけどフェイトの場合盗まれたらやばいからね。

「まあこれはフェイトが一応持つてて、もしもの時の保険の為に

「うへ、うん」

アギトに回復魔法をかけてもらっているフェイトは軽く頷きそのデバイスを自分の懷に入れた。

あー、そういうアギト今マッサージしながら回復魔法使つてるもんなあ。器用だな。

「やへだ、そう言えばオウカつて、デバイス何処にあるの〜？」

フェイトがふぬけた声でそう言った。

「ああ、これだよ

そう言つて腕に付けていた腕輪を見せる、これ結構良いからね。大きさも変更可能だし。

「ふへん、これなんだ〜」

つかフェイトふぬけすぎじゃない？アギトつて上手いの？ねえ。

「これでも資格は取れる腕前だ」

意外に高性能になつてんなおい、つか最近腕上がつてるんじやない？回復魔法の腕。

「へえ、……そうだ。アギトつてフェイトとゴニーゾン出来る？」

「んへ、やつてみないとわからねえな」

アギトは原作と違い特殊な改造を加えられているからね、よく分からぬけど。

「まあ、明日探索だよ。準備は良いね」

「うん」

氣を引き締めていかないとラジチが殺されるからね。

そう思いながらテレビのリモコンをつけた、お金持ちはテレビが沢山あるね。トイレにもあったし。

『長野県市で起きた連続怪死事件の被害者はこれで19人になりました』

どうやら結構やバイらしいね。

嘘……そんなに

どうやら被害者は馬鹿だったようだ、つか昨日一人で出歩いていたもんな……。

「じゃあ僕トイレに行つて来るね」

そう言って部屋を出る、田指す場所は書斎。

「失礼します」

「おや? オウカ君ですか? どうしたんですか?」

「いえちょっと……なんで木蓮センナが殺人事件を起こしてるのか気になつて、つか理由知つてんだろ？あんた」

次の日、私とオウカは街に出た。

被害者は19人、オウカ曰く後一人でこの事件は終るらしい。何でそんな事知つてるのか聞いたら。

「フェイトが修行で疲れて寝てる時に聞き込みに行つた

と普通に返つてきた、そういう日を開けたらオウカは居なかつたら……本当に聞き込みに行つてたんだと思う。けどどうして服に返り血が付いてたんだろう。本人曰く「襲い掛かってきたのは向こうだから、それに殺してないから」らしい。

「で、ここからは別行動？」

「そうだね、まあどうせ毎食は食つてるし……うん、まあフェイトなら勝てるよ」

オウカ曰く私とは相性が良いらしい、ただあくまで高速移動を主体にした戦闘。

「……じゃあいいで解散！！」

オウカがそう言つと私たちはそれぞれ探し回の事にした、アギトは私と一緒に行動だけだ。

本当に見つかれば良いんだけど。

「あのせ、フロイト…………いや……なんでもねえ」

如何したんだアギトは……。

「少し休憩にしよう」

結局あれから八時間くらこすぎてもう夜になつていた。

「……オウカの奴、だからあたしとフロイトを組ませたのか？」

「え？ それってどういっ」

「なあお前等」

アギトが別の方を見て何か言い私がそれの意味を聞こうとしたら後ろから声がした。

振り向くと髪を茶色に染めて凄く腰パンでピアスを付けている、俗に言ひ不良だらひ。

「俺と一緒に遊ばない?」

「え、えっと……」

「こいつら人とはあんまり関わりたくない。」

「…………フハイト、気をつけろ」

アギトがそう言ひ、何故か立ち上がり警戒している。

…………フードを被った少女がこっちに近づいてくる。

「これで…………最後」

「……ふう、まだ見つからないか」

如何しよう……。と言いたいけどアギトとフェイトを組ませ別行動にしたのには理由がある。

木蓮センナが追つてるのは不良だ、だが最後の一人となつた今うかつには姿を出さないし人通りの多い場所に居る事になるだろう。だけどフェイトとアギトは美少女だ、不良はその姿に目を奪われ近づく。

それを木蓮センナが見つける、まあ絶対に見つける筈だ。残された時間も無いから間違いなく尾行してはづだ。

あ、向こうの方に魔力反応が。

「お、結界が張られたな。じゃあ僕も行かないと」

ドスドスドス！！

僕はジャンプして攻撃をかわす。

あ、危ない……こきなり何かを投擲されたよ……ってトランプ?
それを触つてみる。うん、これ鋼でできる。

「あー、惜しいナア」

声をした方を、正確には攻撃した人を見る。

赤毛で、ぐく普通の少年、右半分を覆うような仮面。服はペエロのよ
うな物だ。

「……いきなり何?

「僕と戦つて用」

「こいつ……バトルジャンキーか?

「やだ、今から用事があるから

急いで行かないといけない。

「ノクタル・ルージアス」

……。

僕は何時の間にかデバイスを着て刀を振り下ろしていた。

「おおつと、危ない危ない

「…………おこ」

「イツ、 何で……

「ノクタル・ルージアスを知ってるのか?」

「知ってるも何も僕の上司サ、 命令で君を処分しに来ただけだヨ」

「そりか……」

「この怪しい道化師の後ろの建物である廃ビルが斜めにずれる……。

「ならお前を倒してノクタルの居場所を聞く

「出来るかい? 失敗作

ビルに鱗が入る。

「関係ない、 ぶつ飛ばす

「奇遇だね、 僕もだ

ビルが完全に壊れる、 二つの戦いが始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0299ba/>

テンプレート？夢のまた夢だよ

2012年1月14日19時41分発行